奄美の地域メディアを俯瞰する：
テレビ放送・ビジュアルメディア編

―― 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その２ ――

加　藤　晴　明

『中京大学現代社会学部紀要』　第10巻　第1号　抜　刷

２０１６年１０月　　PP. 41~102

奄美の地域メディアを俯瞰する：テレビ放送・ビジュアルメディア編

―― 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その 2 ――

加　藤　晴　明

本稿の位置づけ：本稿は、奄美の地域メディアの俯瞰図を描く執筆企画の一部である。一連の研究は以下のように構成されている。

前号『中京大学現代社会学部紀要』第 9 巻第 2 号

Ⅰ部　歴史・印刷メディア編

1 節　奄美とは：地域特性

2 節　メディアが沸き立つ島

3 節　奄美の思い出のメディアスケープ

4 節　奄美の新聞メディア

5 節　奄美の雑誌メディア

6 節　奄美の出版メディア

7 節　小括

本号：『中京大学現代社会学部紀要』第 10 巻第 1 号

Ⅱ部　テレビ放送・ビジュアルメディア編

― 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その 2 ―

1 節　テレビ時代の到来とテレビ事業のひろがり

2 節　奄美の民間ケーブルテレビ

3 節　奄美の公設ケーブルテレビ

4節　奄美の写真・ビジュアルメディア事業

5節　小括：かたる・つながる・つくる・ひろがる

Ⅲ部　島外メディア編

― NHKの奄美番組と奄美映画からのメディア社会学 ―

1節　島外メディアとしてのNHK

2節　NHKの紀行番組と「新日本風土記　奄美」

3節　奄美が舞台の映画・ドラマ

4節　小括：奄美をめぐる〈表出の螺旋の多属性〉

次号：『中京大学現代社会学部紀要』第10巻第2号予定

Ⅳ部　ラジオ・ネット編：島を再発見する文化運動

Ⅴ部　音楽メディア編：奄美うたの〈メディア的展開〉

本号目次

1節　テレビ時代の到来とテレビ事業のひろがり

●テレビ時代の到来

●奄美のテレビ放送業界

●地域メディアとしてのケーブルテレビ

2節　奄美の民間ケーブルテレビ

●奄美大島のケーブルテレビ：奄美テレビ

●奄美大島のケーブルテレビ：瀬戸内ケーブルテレビ

3節　奄美の公設ケーブルテレビ

●徳之島：天城町ユイの里テレビ

●沖永良部島：和泊町サンサンテレビ

4節　奄美の写真・ビジュアルテレビ事業

●写真による奄美の記録・表現の始まり：芳賀日出男と奄美

●松田幸治と写真集・観光ガイドブックの発行

●奄美初の映像プロダクション：越間誠とコシマプロダクション
●アマミノクロウサギの子育て発見者浜田太と映像事業
4節　小括：かたる・つながる・つくる・ひろがる

1節　テレビ時代の到来とテレビ事業のひろがり

●テレビ時代の到来

戦後の奄美の中で、日本に復帰した1953年に次ぐ記憶に残る年のひとつが1963年（昭和38年）である。復帰10周年のこの年、奄美でもテレビ放送が始まった。そのテレビと深く結びついた大衆歌謡の世界では、田端義男が歌った「島育ち」と三沢あけみの「島のブルース」がヒットし、奄美を歌った二つ曲が年末の紅白歌合戦で流れたからである。

この年の地元新聞にも、テレビ関係の記事が多くみられる。南海日日新聞の紙面にその盛り上がりの様子を追ってみよう。

2月6日：「“テレビ商戦”活発化　早くも七百台予約？」という見出しのもと、数台のテレビが見本用として届いたことが報じられている。販売業者が二倍に増え、大手家電メーカーからの宣伝員やセールスマンの到着など、販売が混戦模様となりそうなことや、遺族生協、学（学校関係者）生協などでは20ヶ月から30ヶ月の月賦販売の仕組みを整えていることなども詳細に紹介している。
6月9日：6月に入ると、NHKの試験放送（6月8日）に興奮する人びとの様子を次のように伝えている。

「初の番組放送にわく　待ちこがれたテレビ　きょうも試験的に」
午前十時これまでのテスト・パターンにかわってニュース、ついで

法律相談室科学時代などの番組が放送され町の電気屋さんや家庭のテレビの前はたちまち黒山の人だかり。…午後五時から再び番組が中継放送され、こどもニュースやマンガがこどもたちの人気をさらったが、はじめてテレビをみる人も多く町はテレビの話で持ち切りだった。同夜は「プロ野球ナイター」が放送されるとあってNHK中継所にはこのままぜひ続けてほしいという電話が殺到係の職員は断るのにてんてこ舞いだった。（南海日日新聞：1963.6.9、「　」は見出し）

6月10日：開局の日は、次のような見出しで記事が掲載された。（ただ、この段階では総合放送のみが開局し、教育放送はマイクロウェーブ回線ができた9月からである。）

「復帰十周年　待望のテレビきょう開局　花やかに祝賀式典」

開局式以外にも、午後から桟橋前広場を出発して、約一時間にわたって市内の目抜き通り関係機関の自動車約五十台が行進することを報じている。昭和30年代半ばテレビの普及期は、街頭テレビ体験も含めて日本中がテレビを熱狂的に需要した時期である。なかでも国民が熱狂してテレビに見入った平成天皇のご成婚パレードのテレビ中継は、1959年4月10日である。それから遅れること4年、奄美に「本土並み」のメディアが入ってきたことになる。

6月11日：開局の翌日の南海日日新聞は、テレビ開局祝賀行事にわく名瀬の様子を次のように掲載している。

「これで本土なみ　開局式典　関係者の努力たとう」

祝電披露のあと祝宴移ったが参加者は、「これでやっと本土並みになった。十年の遅れを一気にとりもどせる」と喜んでいた。（南海日日新聞：1963.6.11、「　」は見出し）

ちなみに、このころ名瀬には、「奄美映劇」「朝日館」「名瀬東映」「中央会館」の四つの映画館があり、新聞の広告欄にも映画の宣伝が大きなスペースを占めていた。6月9日のテレビ記事の下には、市内の映画館がテレビ放送を機にその影響を懸念して洋画上映の割合を増したり、人気映画のロングラン公演、ナイトショーの復活など対策を練っている記事も掲載されている。

その年の年末には、MBC（南日本放送・東京放送系列）が民放として初の伝播テストも実施している。ただ奄美で民放が映るようになるのは、MBCとKTS（鹿児島テレビ放送・フジテレビ系列）が本放送を開始する1976年まで待たねばならなかった。つまり奄美では13年間、NHKだけのテレビ生活をしていたことになる。KKB（鹿児島放送・テレビ朝日系列）は1989年、KYT（鹿児島讀賣テレビ・日本テレビ系列）は1996年に本放送を開始している[1)]。

NHKがテレビのカラー放送を開始したのは、1960年である。その後東京オリンピックの1964年での普及を経て、1971年10月に総合チャンネルの全放送時間のカラー化が実現した。その前年、大阪万博が開催された1970年がカラー化の時代といわれているので、奄美では民放はカラー化した時代の後に放送を開始したことになる。

●奄美のテレビ放送業界

テレビ時代の到来は、やがて地方でも、大都市のような民放のチャンネル数が欲しいというモアチャンネルの欲望やさらに自分たちの町のテレビ局が欲しいという欲望と結びついて、ケーブルテレビ開設への動きへと発展した。県庁所在地にしかないテレビ局を、「おらが町」で開局することは、自前のテレビ番組を放送できるということでもある。日本におけるケーブルテレビの定着は、（1）難視聴対策の共同聴取施設から発展した地方都市ケーブルテレビ開局、（2）アメリカをモデルにした都市型ケーブルテレビの移入、（3）農村の農事情報提供を目的とした公設型のケーブルテレビ

の開設という三つの流れの総体としてある。しかも、途中で、通信事業（インターネット・プロバイダや電話事業）を取り入れて収益の多角化・安定化を図ることで定着してきた流れがある。ケーブルテレビも、すでに国民全世帯の50パーセントを超えて普及しているが、この普及が難視聴対策の社会的基盤となり、地上波デジタル放送の開始をスムーズに推し進めるのに大いに貢献したともいわれている。

現在ケーブルテレビといえば、（2）のような、ジェイコム系や大阪・関西・東海といった大都市の大企業の系列の多チャンネル放送局が一般的である。だが、（1）の流れは日本のケーブルテレビの始発の風景として重要である。今日のように大都市・大規模な都市型ケーブルテレビ局が大きく成長する以前は、難視聴対策によった始まった有線テレビが、その共同聴取施設に自主チャンネルを加えることで、ゆっくりとであるがケーブルテレビを普及させてきた。それが、町の電気屋さんなどが始めた再送信・モアチャンネル型の小規模ケーブルテレビ局である。その後、アメリカの多チャンネルをモデルにした大資本・公的資金を投入しての都市型ケーブルテレビの開局が始まり、全体でのケーブル業界を飛躍的に拡大させてきたのが日本のケーブルテレビの発展の歴史でもある。

他方で、戦後有線放送電話のような自主放送施設（最盛期2600施設）を開局してきた前史のある農村では、農水省関係の補助事業を使ったりしながら、有線放送電話の映像版ともいえる全戸加入型の有線テレビなども各地に登場してきた。これが（3）の流れである。

奄美群島でのケーブルテレビの開業は、民放が入って10年あまり経てからである。ちなみに現在の奄美には、映像コンテンツを制作できるおもな事業者は以下の六つである。①奄美テレビ（奄美大島・奄美市）、②瀬戸内ケーブルテレビ（奄美大島・瀬戸内町）、③コシマプロダクション（奄美大島・奄美市）、④浜田太写真事務所・エアポートTVネットワークジャパン（奄美大島・奄美市）、そして公営のケーブルテレビとしての、⑤天城町ユイの里テレビ（徳之島・天城町）、⑥和泊町有線テレビ＝サン

サンテレビ（沖永良部島・和泊町）である。奄美群島内だけで、これだけのテレビ・映像事業者が存在することはある意味では驚異的なことである。

そして留意しておかなければならない点は、奄美をめぐるテレビ事業者が、こうした島内のテレビ・映像メディア事業者という〈島内のまなざし〉から奄美をフレーム化する事業者だけではないことだ。奄美にはNHK、鹿児島放送、鹿児島テレビ放送、南日本放送の支局や記者が在駐している。当然のことではあるが、新聞は島の二紙（南海日日新聞・奄美新聞）が読まれているが、日常のテレビは、鹿児島からの放送が見られている。現在の奄美には、NHKに加えて、鹿児島の南日本放送（MBC／東京放送系列）、鹿児島テレビ放送（KTS／フジテレビ系列）、鹿児島放送（KKB／テレビ朝日系列）、鹿児島読売テレビ（KYT／日本テレビ系列）の民放4局も放送されている。放送はされていないがテレビ東京系列の取材業務を担う映像プロダクションもある。これは、島内情報の発信・流通に関して〈マス・メディアとの接合・共振〉の回路があるということ、マス・メディア経由で島内に再帰する回路があるということでもある。

このように、NHKに加えて、民放の五つの局がそれぞれ奄美に固有の局員や業務契約の事業者を抱えているので、島から県域局、そしてキー局への情報発信のルートはできているといえる。つまり、島には、テレビメディア記者が何人も常駐しているのである。少し複雑なのは、鹿児島や福岡・東京からの奄美報道は、〈島外からのまなざし〉にもとづくテレビ報道ではあるが、その内実では〈島内のまなざし〉を経由していることである。もちろん、島内出身の記者であってもカメラを向ける目線自体は、〈島外からのまなざし〉として対象をフレーム化しているかもしれない。こうした奄美報道の場合には、奄美を舞台にした映画などと異なり、両者のまなざしは相互浸透的であるともいえる。

そうした相互浸透的な関係を通じて、鹿児島からのローカル報道のなかに、さらに本局・キー局から配信される報道のなかに、奄美発の映像ニュー

スが取り入れられる。つまり、奄美の映像ニュースは、基本的には鹿児島の放送局発というかたちで奄美の人々に届くことになる。種子島・屋久島の場合には、鹿児島市から直接取材が可能であるのに対して、遠島にあたる奄美の場合には、島にスタッフが常駐して鹿児島に奄美のニュース映像を送る必要があるからでもある。そのニュースが、奄美の人々に環流してくるわけである。つまり、映像ニュースの場合には、ケーブルテレビのような地元で生産・消費される映像情報の流れもあれば、鹿児島県エリアでの映像情報の流れもある。

NHK の場合には、地元報道室に一人のスタッフ（前二代は島内出身者。現在は島外出身者）がおり、報道室からニュース番組の企画が鹿児島の放送部にあがる形で事前打ち合わせが行われる。その後に取材し放送されるという流れになっている。ただ、ニュース話題は、事前相談過程があるとはいえ、実質的には「地元スタッフまかせ」ではある。取材されたニュースは、基本的にはなんらかの時間帯に報道される。ニュースによっては、福岡総局から放映されたり、全国ニュースのなかで放映されたりする。鹿児島放送局の中では、離島では奄美にだけ報道室がある[2)]。

奄美にいる NHK や鹿児島の民放の支局員・記者の存在を指摘したのは、従来の地域メディアについての議論が、地域内のメディアに限定されすぎているからでもある。地域のメディアは、地域の人にとって重要である。新聞・ケーブルテレビ、コミュニティ FM など地域メディアといわれるものの存在意義を語る際に、奄美であれば〈島内のまなざし〉が重要であることは当然だ。島の魅力を強力に発信するメディアとして、島の新聞、島のテレビ、そして島のラジオ（あまみエフエムのようなコミュニティ FM）が全国的に注目されている。もちろん、地域の語り部として地域内のメディア事業は重要である。

しかし島のメディアを俯瞰しようとした場合、〈島内のまなざし〉をもちながら、それを外に向けて発信し、外から放送し、外で制作される番組という文脈（コンテクスト）のなかで奄美を語り、そうすることで奄美に

環流してくる情報の流れもある。それは限られトピックの報道ニュースであることが多いが、県内・全国に奄美を放送する大きな役割を果たしていることも事実である。

当たり前のことなのだが、地域のメディアを包括的網羅的に理解していくためには、地域メディアを地域内の地産地消という狭い定義に閉じ込めるのではなく、〈マス・メディアとの接合・共振の回路〉を含めるためにも、そうした県域局や広域局・キー局の一翼としての島の記者の存在、彼らの役割をも視野にいれる必要がある。われわれが、狭義の地域メディアではなく、〈地域のメディア〉という話を多用しているのもそのためである。

表１：奄美のテレビ放送・映像関係事業

キー局	鹿児島県のテレビ局	地元のテレビ･映像･支局･記者	スタッフの様態
NHK	NHK	報道室	1（鹿児島出身）
日本テレビ系列	鹿児島読売テレビ（KYT）	奄美テレビ	
テレビ朝日系	鹿児島放送（KKB）	記者	1（元地元紙の記者）
フジテレビ	鹿児島テレビ放送（KTS）	記者	1（元地元紙の記者）
東京放送系列	南日本放送（MBC）	支局	1（元地元紙の記者）
テレビ東京		コシマプロダクション	
---	---	奄美テレビ	約 17
---	---	瀬戸内ケーブルテレビ	約 6
---	---	コシマプロダクション	約 8
---	---	エアポート TV ネットワークジャパン	約 2

●地域メディアとしてのケーブルテレビ

すでに述べたように、奄美群島には奄美大島に民間ケーブルテレビが 2 局と、徳之島・沖永良部島に公設ケーブルテレビがそれぞれ 1 局、つまり群島で 4 局のテレビ局がある。琉球弧でみれば、沖縄・那覇に 1 局、宮古島、石垣島に 1 局があるのみであるから、南西諸島 7 局のうちの 4 局が奄

美群島にあることになる。

日本のケーブルテレビの歴史についてはすでに述べたように三つの流れがあるが、奄美群島の場合には民間の2局が前述（1）の共同聴取施設発展型・地方都市型のケーブルテレビであり、徳之島と沖永良部島の2局が（3）公設型である。

日本のケーブルテレビは、ケーブルビジネスと自主番組制作という形でのテレビ局（番組制作・配信）事業という二つの機能を合わせもってきたところに特徴がある。ケーブルビジネスの部分は、次第に多チャネル化と電話・インターネットのトリプルサービスを提供するケーブル・インフラ事業として成長することで収益を確保してきた。その意味では、地域の放送メディアというよりも、通信インフラビジネスになってきており、自主番組（ローカルテレビ局としての収益）で事業収益が成立しているわけではない。自主番組を事業存立の基盤にするような地域メディアの旗手は、自主制作率が高く、かつ主な収益を放送広告に依拠して成立しているコミュニティFMにシフトしているといえる。

日本全体でみればケーブルテレビの加入者は、全世帯の50パーセントを超えて増えて続けているが、他方で2012年以降は、専門チャンネルによる収益は伸び悩んでいる一方で、衛星放送（とりわけBS放送）は着実に市場規模を拡大してきている。つまり、ケーブルテレビの多チャンネル化の魅力（収益源）は、次第に衛星放送にシフトしつつあることになる。このようにケーブルテレビの事業環境は厳しさを増しているのだが、他方で、地上波デジタルの難視聴を補完する機能を担ってきたのもケーブルテレビであり、それが加入増にもつながっている。

いずれにしても、多チャンネルモデルとしてのケーブルテレビの魅力は減少するなかで、改めて地域に密着した番組づくりがその存在意義の鼎となってきている側面がある。とりわけローカリティが高い地方のケーブルテレビや農村多元情報システム（MPIS）として導入されたケーブルテレビは、自主制作番組を核として地域番組（ローカルコンテンツ）の提供に

努めてきた。そうした地方・農村のケーブルテレビの活躍に対しては、①地域住民の連帯、②地域コミュニティの醸成、③地域の活性化などの評価が与えられてきた。

もちろん、地域に定着し、地元住民から「おらが町」「おらが村」の大事なメディアとして評価された局がある一方で、そうでないものまで多様である。かつて全戸加入型で、自主放送の質で全国的に有名になった大分県の大山町（現在、日田市）は、もともと“梅栗つくってハワイに行こう”というスローガンのもと、6次産業化の先駆けとして有名になった村である。かつて地域活性化のモデル県である大分県が展開した一村一品運動のモデルともなった町である。人口5000人ほどの町の農業情報の提供をかけごえに始まったその町営ケーブルテレビは、1987年に小規模再送信施設を統合するかたちで始まった町営のテレビ事業である（農村多元情報システムであり、新農業構造改善事業として展開）。この大山町の町営ケーブルテレビは、町内の身近な情報をニュースとして提供する自主放送に力をいれ、地域に定着し、住民の多くが「おらが町のテレビ」意識をもち、その定着した景観は、地域の文化的情報化とさえいわれた。

こうしたケーブルテレビの経緯や今日的な動向のなかで、奄美群島のケーブルテレビは、どのような位置と現状にあるのだろうか。結論を先取りすれば、奄美の民間ケーブルテレビは、これまでもそうであったが、ますますその自主放送に放送メディアとしての存在意義を求めていくことになるように思われる。いずれにしても、奄美群島の四つのケーブルテレビ局は、“町のテレビ”として親しまれてきたのであり、またこれからも町のテレビとしての固有のコンテンツが重要となる。

各ケーブルテレビ局が放送するローカルなコンテンツが、島の人々に意味あるものと思われる限り、事業は支持されていく。奄美の場合には、大都市のケーブルのように通信事業にウェイトをおくような展開にならなかったことが、逆に「町のテレビ」としてのケーブルテレビのあり方を規定してきたともいえる。一般的な意味でのローカルな出来事の提供という

だけでなく、島独特の自然・祭りのようなコンテンツを通じて昔の島の暮らしを知る高齢者に“なつかしさ”を提供したり、島外の出身者と島を繋いだりする独特のコンテンツを提供してきている。

そもそも地域のリアリティとは何なのだろうかと考えた場合、地域のコンテクスト（意味の磁場）そのものであるということができる。奄美のそれぞれのケーブルテレビは、そうした人々に共有される〈奄美コンテクスト〉づくりに特化することで支持を集めてきた。それは、「島がむる大好き」という島への思い強い地域でのケーブルテレビのあり方として最も正攻法な番組づくりである。

2節　奄美の民間ケーブルテレビ

●奄美大島のケーブルテレビ：奄美テレビ

奄美テレビ（ATV）は、つまり大都市型ケーブルテレビの隆盛期以前に開局されたいわゆる難視聴対策・再送信に自主チャンネルを加えた地方都市型のテレビ局である。設立は1987年、開局は1988年である。奄美大島の北部を対象にした北大島局は1995年開局である。従業員は約17名。契約世帯は、約3000世帯。インターネットプロバイダ事業を展開していない。業務提携として、讀賣テレビの奄美支局を担当しているほか、MBC南日本放送とも協力関係にある（取材：2008.9.8、2014.3.10）。

ケーブルテレビの自主番組は、通常「まちのテレビ局」として、①ニュース番組（日常の出来事）、②企画番組（地域を取材したテーマ番組や特別番組）、③イベント番組（録画・中継）に三つのコンテンツから成り立っていることが多い。また、そうしたイベントをパッケージとして販売したりもする。

奄美テレビの場合には、こうしたケーブルテレビの典型といえよう。もうひとつの特徴は、奄美テレビが、傘下・関連の企業グループ（ATVグ

ループ）を形成していることである。島の成功した企業は、多角経営の企業グループ化していくことは、長く奄美でフィールド調査を続けている駒沢大学須山聡研究室の調査でも明らかにされている。須山研は、奄美最大の企業グループのひとつであるマルエーグループが、大島紬と黒糖の製造卸問屋という個人事業から出発して海運事業や黒糖醸造事業を軸に20社に及ぶ企業グループへと発展していく経緯を紹介しながら、次のような見解を述べている。

> 奄美大島では、成功した企業が他分野に進出し、事業の多角化を志す例が多い。これは一種のフルセット型指向であり、資本が地域全体に十分に行き渡らない場合において、少ない資本を一点に集約しようとする動きによって形成される。（須山聡編著『奄美大島の地域特性』、255頁）

フルセット型産業構造とは、全ての産業分野を、一定レベルで一国内に抱え込んでいる経済構造のことで、戦後日本の経済構造の特徴として指摘されてきた構造である。つまり域内での企業間のつながりを密にして経済を回していくという指向である。奄美にあてはめてみれば、島という限られた域内で、グループ企業間の関係を密にして資本を有効に集約利用して企業グループを発展させていく指向といえよう。

島の場合には、一つの業種から得られる利益が限られていていることからも、関連する業種も含めて多種な種類の事業を展開をしない限りは、企業規模は拡大しない。事業規模と資本を拡大することを指向する場合には、いきおいフルセット型にならざるを得ないと言ってもよいのかもしれない。

マルエーグループのこうしたフルセット型指向は、規模は小さいが奄美テレビにもあてあまる。奄美テレビは、単なるケーブルテレビ事業の枠を

超えて、ATV グループとして不動産・新聞（奄美新聞）・観光・飲食・旅行・精糖・ネットなどの多角的事業への拡張を試みてきている（撤退した部門もある）。こうしたフルセット型指向は、奄美のメディア事業者の中ではかなり異色な存在といえるかもしれない。

地上波デジタル時代になり、地方のケーブルテレビは、さまざまな変化を余儀なくされているが、2013 年に創設者から 2 代目に社長が交代したことを機に、奄美テレビも五つの方向での転換を図っている。

（1）自主制作番組の強化：オールバラエティ化

2013 年の 4 月から、番組制作の方向が、ニュースから企画番組中心へと大きな転換が図られている。30 分ニュースの時間を縮め、自分達が企画制作するというかたちでそれ以外の番組制作に力を入れ始めている。スタッフ 17 名中、制作が正規雇用・非正規雇用入れて 4 人。社長・専務ともに制作に関わりながら、さまざまな番組を制作している（2014.3 月取材時）。この転換は、専務の Y 氏の言い方によれば、「奄美テレビオールバラエティ化」という路線なのだという。つまり、従来のニュースを中心として番組制作から、自主的につくる企画番組とイベント中継（あるいは録画）への転換を図り始めたのである。

たとえば、表 2 にあるような「プチ探検に出かけよう」は、30 分番組を 2 週間に 1 番組制作する。コンテンツ制作の表をみればわかるが、限られスタッフで、たくさんの番組を制作しており、制作の負担はかなり高いことが読み取れる。

企画番組の強化は、3000 世帯規模の地方ケーブルテレビ局にとって、時代の趨勢に対抗しての生き残り策ともいえよう。ケーブルテレビが地域のニュースメディアとして価値があった時代は終わったという認識でもある。「おもしろい番組」「人に見てもらえる番組」それらを通じてスポンサーを集め放送していく。奄美テレビの番組をテレビ欄をみても、地域に準拠した奄美発の娯楽番組が数多く制作されていることがわかる（表 2）。こ

のように、そうした地域発の娯楽番組を発信する放送局への脱皮を図っている。

こうした自主番組の強化は、ジャーナリズムからの後退というよりも、もともと島の報道ジャーナリズムは新聞が担っていることを意識し、速報性で競合するのではなく、独自の娯楽的ジャーナリズムのようなものを開拓しようとしているようにも思われる。実際、「幸ちゃんのやんごOH！OH！」などの番組などを見ても、一人の島役者を使った娯楽番組でありつつ、テレビでしかできない娯楽による奄美の地ネタ情報の発信の形を模索している。番組には、島役者をＦ氏をキーマンにして、「奄美で芸能をつくる」という狙いが込められているという。

（2）中継力の強化

中継機材の強化が図られている。中継車や6カメラのマルチスイッチング機材等、ライブで画面を切り替えながら中継する本格的な機材体制が整ってきている。加入者をつなぎとめ、スポンサーを確保するためには「面白いものをつくらないとダメ」という発想は、こうした中継力強化にも反映されている。

（3）ネット配信への積極的展開

奄美テレビでは、ネットへの発信も熱心に展開している。テレビ放送から3日後にはネットに上げる。そうした放送とネット配信とを組み合わせつつある。視聴者が競合しないという判断からでもある。実際、YouTubeにはアマミテレビ名で数々の番組がアップされている。ネットとの結びつきとして、ユーストリームを使い中継も試みられている。奄美まつりの舟こぎ競争では、インターネット配信で3300PVを記録したという。離島にとってはインターネットは、本土に対する発信を可能にするメディアであることがしばしば語られてきた。しかし、その環境を有利に展開しつづけらけるかは、「何をつくるか」にかかっている。奄美テレビもそのことを

意識して、島ならではの面白い番組づくりにこだわっているように思われる。

（4）他企業とのコラボレーション

新しい試みとして、地元の他のメディア事業とのコラボレーションによるコンテンツづくりの試みがある。他のメディア関係の事業者と一緒にひとつのコンテンツをつくり発信する試みである。ネットインフラ企業の「オーシャンブロードバンド」、ブログ企業の「しーま」、音楽産業の「セントラル楽器」、そして地元のクリエーターなど、それぞれ規模は小さいが島に存在する各種のメディア事業と組み合わさることで、それぞれの優位性を生かした情報発信を指向している。

島のさまざまな事業のリーダー達の語りに共通することでもあるが、取材に応じた専務のＹ氏の語りにも、島に残った者でも、やりかたで「面白いことはできる」そんなメッセージを読み取ることができる。確かに、「幸ちゃんのやんごOH！OH！」などの娯楽番組は、余興番組でもある。余興文化は奄美の文化のDNAでもある。芸能の余興、これは島唄だけではなく、奄美のテレビの番組のなかにも表出されていることが興味深い。

奄美テレビのテレビ番組欄から、さまざまな企画番組をみると、徹底して奄美に焦点をあてて、①奄美を発見する番組が多いことがわかる。また②イベント放送もかなり多い。それと③再放送が多い。①奄美の発見する、②イベントを放送する、③再放送する。

地域メディアは、地域の自己語りの文化装置であり、地域の自己物語装置である。そうした視点からみると、奄美テレビがおこなっている放送は、企画番組を通じた直接的な島語りと、イベント放送を通じた間接的な島語りに満ちていることがわかる。「総エンターテインメント化」という方針からもわかるように、それは、速報にもとづく報道を重視する新聞ジャーナリズムや、論説という形での新聞ジャーナリズムとは異なる、娯楽的な番組からの奄美の情報発信へのアプローチである。限られたスタッフと制

作能力に見合ったというだけではなく、地域内のケーブルテレビという映像メディアの特性に見合った、また視聴者にニーズに対応した制作戦略ということでもあろう。

自主番組制作は、確かに、番組企画者らを中心にした限られたスタッフによる奄美語りではある。しかし、視点を変えれば、それでもなお、そうした番組によって、濃厚な奄美の映像アーカイブスが日日形成されている事実は注目されねばならない。地域メディアは、全国メディアや県域メディアと異なるのは、発行域や放送域が限られているだけではなく、そもそもメディアが存在しない地域も多いことである。視聴（聴取）可能域が限られているからである。地域にメディアがないことを考えれば、地域にメディアがあることの意味は大きい。

写真：奄美テレビ社屋（撮影：加藤晴明、2014.3.10）

奄美テレビが、奄美の映像制作力において他のメディアを圧倒していることを考えれば、この点での地元テレビの果たしている役割は大きい。これらの日日の番組が、データとして蓄積されていることは、奄美の記録・記憶としても大きな意味をもってくることになる。それは、いずれ時間を

経て生活風俗資料としても貴重なものになることが予想される。

これらの番組の一部は、すでにYouTube配信というかたちでネットに上げられて、契約者以外の人や島外の人々にも公開されている。YouTube公開により、ある意味では、アーカイブスというかたちで未来の視聴者に向けて公開されていることになる。

表２：奄美テレビの放送番組（自主制作・イベント録画等）

種　類	番　組　名
ニュース番組	どぅしのどぅしはぁ～みんなどぅし!（30分）
企画番組	ほっとけトーク（30分）：テーマ「創立20周年記念進化する奄美看護福祉専門学校」/国民文化祭を見に行こう Nanは何しに奄美へ（30分） かしましおめかし（30分） 幸ちゃんのやんごOH！OH！（60分）：居酒屋ならびや シマ・トーク（60分）：役者・中村京次の自分史/東日本大震災×生きる/アニメ編～Vol.4/奄美大島の地方創生とバニラ効果/ 独占！クボタツTV（60分）：癒やしの島は移住の島になる!?/冬の奄美でテニス!? 投稿☆おもしろ奄美（30分） プチ探検に出かけよう！（30分）：むちゃ加那の碑を求めて青久集落へ/いにしえの歴史の薫り 手安集落/油井から小名瀬の史跡めぐりの旅/安室窯·篠川・白浜への旅/たおやかな風､ゆるやかな時、宇検への旅/人びとの、産業の、集落の歴史 大棚への旅/奄美の白糖の歴史伊目集落編/花天集落の今と昔/故郷忘れがたし管鈍集落編/芦花部集落編その1/神秘の西古見る集落編その2/ ちょぴへいのMUSIC GAPPA！（30分） いにしえの島唄（?）：翔たけ歌かけの抄 ユムグチ800！（60分）/SP編～奄美－東京間どうなるの？/BOND&JUSTICE（60分）/東北関東大震災支援の記憶 結ノ島CAMP2015（60分） 奄美市議会議員選挙に伴う立候補予定者による政策発表（150分） 沖縄からの情報発信ジャーナリズム論特別講義（60分） 島っちゅベイサイドミュージック（30分） アマミックスミュージックス

種　類	番　組　名
イベント番組	さたぜぇないとふぇすてぃバル 2015（60 分）/Vol1.~Vol.3 奄美市民文化祭～舞台発表 1 日目(60 分)/2 日目・昼の部/2 日目夜の部 しゅみち長浜節世界大会 in 喜界島（120 分） AMAMIAN SURFING CLASSIC 2014（30 分）/Vol.1~Vol.3 第 47 回大島北高文化祭 2015（60 分）/Vol.1~Vol.3 第 8 回奄美歌謡のど自慢まつり（60 分） 第 52 回奄美まつり舟こぎ競争大会 2015（120 分）/Vol1.~Vol.5 第 5 回奄美市民体育祭（60 分） 第 4 回奄美市民体育祭（60 分） 5 周年記念 ASA 大島ジュニア新体操クラブ発表会（60 分） 第 5 回奄美紅白歌合戦 2014（120 分） 唄と踊の共演～笑顔を届けようチャリティショー（120 分） 第 10 回奄美歌謡選手権大会 2014（120 分） 平成 23 年度奄美市名瀬·住用地区生涯学習講座閉校式（120 分） 全国奄美人大会（2013） 沖縄大学土曜教養講座「世界遺産と沖縄」(120 分) うまいんピック 2013～島ごはんの祭典（60 分） 平成 22 年度奄美市立小湊小学校ビューぐるバンド（60 分） 奄美市立小湊小学校創立 140 周年記念式典（60 分） 奄美市立小宿中学校吹奏学部～第 12 回定期演奏会（60 分） 第 10 回緑球会小学校対抗親善軟式野球大会 2013（60 分） 奄美高校吹奏学部定期演奏会第 11 回定期演奏会（60 分） 第 51 回和泊町農業祭むら自慢芸能大会（120 分） 第 36 回奄美市民文化祭（120 分）/2 日目・昼の部・夜の部

（南海日日新聞：2015 年 10 月 5 日(月）～19 日(日）までの 2 週間のテレビ欄から作成）

●奄美大島のケーブルテレビ：瀬戸内ケーブルテレビ

奄美大島の南端の町である瀬戸内町にも、瀬戸内ケーブルテレビ(SCT)がある。もともと各集落にあった難視聴用の共同組合アンテナの施設のメンテナンス会社であったのが、1988 年にケーブルテレビ会社として発展して 1989 年に開局した企業である。つまり小規模再送信施設を統合するかたちで生まれた典型的なローカルなケーブルテレビである。奄美テレビ同様、母体は 1960 年代前半に始めた電気店・電気工事店である。社長の武原氏は、1940 年生まれである。

加入世帯2500、スタッフ11名程度である（取材：2009.08.17、他）。人口減少の激しい地域で、朝の10時から夜の12時まで、月1570円という日本一安いケーブルテレビをめざして格闘している地域に根ざした家族的な雰囲気をもつ放送局である。地元では「1ちゃんねる」として親しまれている。

また、瀬戸内ケーブルテレビには、音響装置を持参して展開するイベント会社として顔がある。瀬戸内町だけではなく、島内のあちこちの集落イベントなどで活躍している。それは同時に、放送番組の収録の機会ということでもある。

瀬戸内ケーブルテレビは、ニュース番組がない、番組表がないことが特徴でもある。住民同士が互いに顔見知りである狭い町内では、不幸な出来事はニュースにしにくく、「なぜ、人の不幸を・・」と苦情がくるという。そうした報道は新聞の役割と割り切って、お知らせ放送、イベント収録・放送と環境映像、そして島唄などの音楽放送に徹している

集落のイベントに行って「ただ人を撮ってきて」それを放送する。あるいは関西などの郷友会のイベントで出かけて、それを撮影し島内で流す。社長の武原氏は、「島と関西をうちの電波で結んでいるのです」と語る。

「島を出て行った若い人が、たまに帰って来て、うちのおとうさん、おかあさんの面倒を見てくれてありがとう」と言われるという。

テレビを通じて、島に残った人びとが寂しさを忘れるように、ある意味では映像を通じて人びとの面倒をみているような役に立ちかたをしているテレビである。

幼稚園・保育園の入園式や遊びシーンを取材し、やがてそれを成人式の放送の際に編集して組み込んだりする。時には、視聴者から、「うちの子が映らない」という文句が役所に来たりするという。

狭い地域、ほとんどが家族ようになんらかのつながりのある地域では、どちらか一方に角がたたない放送が求められる。放送のなかで、競合相手のお店のコマーシャルも困ることになるのである。そのため、テレビCM

もお祭りの時だけに流すという。

瀬戸内ケーブルテレビにとって、奄美の文化としての島唄は極めて重要なコンテンツとなっている。武原社長自ら、「われわれとお客様を結ぶのは島唄ですよ」と語るように、自主放送の100パーセントは島唄（この場合には、新民謡も含めて広い意味での島の唄）と結びついているという。

悲しい時にも島唄、嬉しい時にも島唄があればもっと盛りあがる。「ここの人間は、島唄と切れない関係にある」とまで言い切る。

そうした島の唄を環境映像とともに流していく。島唄をかけながら、いろんな景色を流すことで、契約者である年配者が癒される。その意味では、島唄・新民謡を流しつづけることで、音環境や音による癒しを提供していたかつての親子ラジオと似たような存在でもある。

奄美の島唄文化の基本的な特色は、「なつかしゃ」であるといわれるが、古い映像を流すという意味では、瀬戸内ケーブルテレビの放送自体が、「なさかしゃ」という文化的な特質をもった放送といえるのかもしれない。古い番組に対しては、「よかったね。ありがとう。」そんな感謝の電話もかかってくる。また、瀬戸内ケーブルテレビでは、「10人くらい集まっているからあの放送をまた流してよ」といったリクエストに応じて古い番組を流すこともある。たんさんある音源を使ったリクエスト番組なども放送することがある。

このように、契約者の心の琴線に沿った「なつかしゃ」な環境映像や島唄・新民謡の音源を媒介にしたかかわり。それは高齢化が進む地域でのメディアによるケアの実践でもあるのかもしれない。「（年配者への）子守です」という武原社長の語りはこのケーブルテレビの特徴をよく物語っている。実際、われわれが調査で接した町内のある高齢者は、テレビはこの放送（1チャンネル）しか見ないという。

写真：瀬戸内ケーブルテレビの社屋（撮影：加藤晴明、2015.7.5）

もちろん、選挙速報も放送する。各陣営と等距離を心がけ、どの事務所にも顔を出し、開票の際には開票所の開票発表をそのまま流す。それは、まさに、視聴率 100 パーセントの放送となる。

瀬戸内ケーブルテレビでは、自社企画の文化事業として民謡歌手を連れて集落に出向いての夏祭りも企画することがある。文化事業はもうからない。そのもうからない文化事業を通じて、地域の住民に喜んでもらう。それが会社の存在する価値でもあるという。

戦後の瀬戸内町の歴史とともに生きてきたともいえる武原氏。ある意味では町長よりも長く、町の有名人であり続けてきたことになる。政治的に偏らずに、地元に喜ばれる「なつかしゃ」に徹した自主番組づくり。それは、かなり間接的な奄美の語りであるが、しかし奄美文化の核心に沿ったぶれない島語りでもある。「みなさんに喜んでもらえれば」という語りが何よりもこのテレビ局の立ち位置を物語っているのかもしれない。「みんなに好かれる人がやらないとダメだ」というのは、地域メディアの現場でしばしば語られる言葉である。武原氏の語りからは、その言葉がそのまま当てはまるような人柄がにじみでているようである。

もちろん、イベントの中継や、環境映像の記録は、そのまま町の歴史でもある。奄美テレビ同様に、島の中でこうした映像が数十年に渡って蓄積されてきていることの意味も、これからますます高くなってくる。実際、役所の担当者が代わった時などでも、そうした記録映像は威力を発揮している。「地域に地域メディアがあることの幸せ」それは、瀬戸内のようなローカルな町であればあるほど大きいといえよう。

3節　奄美の公設ケーブルテレビ

●徳之島：天城町ユイの里テレビ

奄美・沖縄には全部で、7つのケーブルテレビ局がある。奄美大島に2局、徳之島・沖永良部島、那覇、宮古島・石垣島に各一局である。決して多いとはいえない。そのなかで公設の有線テレビに属するものが、徳之島・天城町の「天城町ユイの里テレビ（AYT）」と沖永良部島の「和泊町サンサンテレビ」である。両局は、全国各地にあるいわゆる公営テレビで、いわゆる農村多元情報システム（MPIS：農水省の補助事業として農村を中心につくられた有線テレビ。業界団体として社団法人日本農村情報システムがあった。）としてスタートしている[3)]。再送信に加えて、農業情報をはじめとする行政域内のさまざまなお知らせ情報やイベントなどを自主番組として放映する。

ケーブルテレビは、ケーブル事業と放送事業の融合形態であるが、両局もそれぞれ両方の事業を展開している。出発点は同じだが、天城町のケーブルテレビは現在（取材時：2016年8月）も町企画課による運営であり、和泊町のテレビは途中から放送事業の一部（制作・配信等）の民営化に切り替わっている。

天城町ユイの里テレビは、「ユイの心で繋がる11テレビ！（ゆいのこころでつながるいいてれび）」として、世帯の8割以上が加入し、町民には

AYT の呼称で親しまれている地域密着の公営テレビである。正職員は、企画課に所属する一般職員と臨時職員合わせて 6 名ほどの体制。そのうち制作は、半数以下（2.5 人）の陣容である。徳之島の三つの町の中での唯一のテレビ局でもあり、他の町の人達からうらやましがられる存在でもある。

開局時の広報には、町の広報紙「広報あまぎ」（1998 年 4 月号、No.348）の表紙に、テレビ局の新社屋の写真とともに、「いよいよ放送開始　天城町ユイの里テレビ（AYT）　町民のくらしに密着した情報を発展」の文字が躍る。また翌月の「広報あまぎ」（No.349）には、「町民一人ひとりがスタッフの自覚を」と題して、4 月 25 日の開局記念式典での記念講演で、農村情報システム協会の部長が「一番大事なのは、町民が AYT を愛し、町民一人ひとりがスタッフだという意識をもつことです」と述べたことが紹介されている。翌年（1999 年）の新年号の広報（No.358）では、昨年の十大ニュースの 1 位に、「町のニュース満載　天城町ユイの里テレビ 4 月に開局！」「町民みんなのテレビ局」とある。

こうして始まった AYT は、法務省の補助金を使い 2013 年春から地デジ化し町内全域に光ファイバー網を整備し、自主放送、地上デジタル放送、衛星放送の再送信、IP 告知放送、そしてインターネットサービス（プロバイダは別途契約）を開始している。

興味深いのは、デジタル回線を通じて有線ラジオ**放送**が 5 局聴けるようになっていることだ。ただ、既存のラジオに有線で接続する必要があるので、畑や車でラジオを聴くことができない。そのため実際に聴く人は少ないのだが、その番組構成自体は、島の放送文化を伺い知ることができる。その構成は NHK 鹿児島の FM 放送以外は、沖縄の FM と AM（NHK−FM 沖縄、FM 沖縄、琉球放送、ラジオ沖縄）であり、鹿児島の民放ラジオは入っていない。そもそも徳之島以南の島々では、デジタル化される前には、ラジオ・テレビともに実質的に沖縄の放送圏といってもよく、人々は沖縄の電波を受けてテレビ・ラジオ放送と接していた事情がある。つまり行政

域と放送域のズレがあるのであり、このズレは、島の文化的アイデンティティを考えるうえでも興味深い。

自主放送の構成は、隣島である沖永良部島のサンサンテレビと似ている。メイン番組として、行政からのお知らせやさまざま催物やイベントの紹介などをニュースとしてまとめた30分程度の番組「結んちゅだより」を**週3日**制作し、それを放送・再放送している。この番組は、週末には、一**本に**まとめて「ワイワイわいど！」として再放送している。

表　AYTの自主番組

番組名	結んちゅだより	あんとぅきーや	ワイワイわいど!
内容	ニュース	思い出の写真·映像	ニュースのまとめ
放送日	月・火・木・（金）	水	土・日
1回目	19：30~	19：30~	07：00~
2回目	22：00~（再）	22：00~（再）	12：30~
3回目	翌07：00~（再）	翌07：00~（再）	15：30~
4回目	翌12：30~（再）	翌12：30~（再）	19：30~
5回目	翌15：30~（再）	翌15：30~（再）	**22：00~**

※金曜日は、朝と昼の放送のみ。

その他に、人気番組として、昔の映像や町民の思い出の写真を流す番組「あんとぅきーや（意味：あのころは）」を週に1本制作して放送・再放送している。この番組でつかわれている昔を覗き込むという意味を込めた虫めがねのようなポーズは、島の子供たちにも定着している。

ケーブルテレビで特番の定番は議会中継である。動画中継がある自治体では、どこでも議員は、テレビ映りを意識してかなり熱のこもった姿勢で臨む（徳之島の場合、三町とも、議会のユーストリーム中継はすでに実施している）。こうした姿は、テレビ・映像効果のひとつとして各地で語られているが、天城町でもそうした効果を語る声は多い。

ケーブルテレビはどこでもそうだが、限られたスタッフで、多様な番組

を作らねばならない。それこそ「番組をみんなでつくる感じ(スタッフ談)」で多忙に仕事をしているという感じだという。3名に届かないスタッフで、土日に多いイベントの取材なども含めてこれだけの番組を制作するのは容易ではない。どのケーブルテレビ・コミュニティFMもそうだが、運動会や祭り、さらに学校関係の行事などのイベント取材・イベント放送が多い局では、スタッフにはかなりの負担がのしかかる。

例えば、AYTでも、期日が同じなので調整が大変な小学校の運動会、町の祭り、それに特番、そして有名な徳之島トライアスロン大会の生中継などイベントは多い。そうした取材活動に対しては、住民たちも協力的であるという。そして自主放送番組は町民によく見られている。

AYTは、鹿児島の民放やNHKとも繋いで月一回鹿児島からの放送のなかで情報を発信している。この鹿児島経由の放送によってAYTのアナウンサーは、天城町内だけではなく、徳之島全島の中ではよく知られた存在になったという。

町民は、この町営テレビをふだんの生活ではAYTと呼んでいるが、町民に親しまれているこのテレビは、成立時に掲げた「町民みんなのテレビ局」として十分結実しているようにみえる。地域の自分たちの生活を伝え語るメディアがあることの幸せを住民は享受しているからこそ、よく見られているといえるのだろう。

もうひとつ重要な情報番組が、市況情報である。市況情報は奄美大島で発行されている南海日日新聞や奄美新聞にも掲載されているが、全戸が新聞を読んでいるわけではないので、自ずとテレビの文字情報による市況情報が重要になる。島の住民にとっては、市況全部の情報が必要なわけではなく、牛の競り市の価格など、島の特産品に関する価格だけがわかればよいからである。

写真：天城町ユイの里テレビ（撮影：加藤晴明、2014.8.18）

写真：ユイの里テレビのスタジオ風景（撮影：加藤晴明、2014.8.18）

興味深いのは、ある町には町営のテレビがあり、隣の町にはないとうことである。公設・公営テレビの費用を税金でまかなっていることになるわけで、その選択は政策的な判断にゆだねられている。地元の議会では、**年間のランニングコストのこと**が議員の最大の関心事になるという。費用対

効果やコストと地域への貢献といった争点を比較する指標はないが、時間をかけて町に定着したテレビは、それが“あることが当たり前”の誇らしいメディアとして町民の生活の中に定着しているといえる。（取材：2014.8.18、2016.8.6）

●沖永良部島：和泊町サンサンテレビ

和泊町有線テレビ（サンサンテレビ）は、1995年（平成7年）農業情報の放送施設（MPIS）として開局した町営のケーブルテレビである。2014年から制作（取材・編集・放送）に関して指定管理の民間業者（ERABUサンサンテレビ㈱）に業務委託している。加入率は90%程度である。契約料（1500円／月）の徴収などの契約者の管理から伝送路の管理までは町で行っている。スタッフは20代から30代のスタッフ7~8名である。南の島のケーブル系のメディアの場合には、台風による被害が大きいが、そうした復旧などもすべて町で管理しているので、基本的には公設公営に近いメディアである。インターネット事業は、回線を民間事業者に開放することで、NTT西日本が提供するサービスを提供している。

放送内容は天城町ユイの里テレビと同様に、鹿児島・沖縄の地上波放送、衛星波放送、CS放送などの再送信（一部有料）と自主放送（コミュニティチャンネルと気象チャンネル）である。沖縄は4つの地上波放送全てが映る。自主放送は、町内イベントのトピックス（「タウントピックス」・20~30分）を週3回と大きなイベントの長編番組とをリピートで放送している。町民体育大会（10月）とジョギング大会（3月）の2回と議会中継（年4回）はライブ中継を行っている。文字広告などは入れているが、営業を伴う事業体という事業には至っていない。

写真：和泊町サンサンテレビの社屋（撮影：加藤晴明、2015.9.10）

町内イベントのトピックスといった放送ではあるが、お知らせに加えて、小中高校の入学式・卒業式から、芸能大会、セレモニー・講演会、時節ものなど盛りだくさんの構成になっていて、町の中で実施されているあれこれのイベントはほぼニュース形式で放送されている。情報の流れという点では、沖州会（沖永良部出身者の郷友会）から映像が送られてきてそれを町内向けに流すことはあるが、サンサンテレビから外向けに積極的に発信する媒体ではない。多くのケーブルテレビがそうであるように、基本的には域内向けのメディアといえる。

ちなみに沖永良部島では鹿児島のラジオ放送の電波はほとんど入らない、よく聴こえるのは沖縄の民放一局である。つまりラジオに関しては沖縄の文化圏にある。サンサンテレビでも、分配器を使ってケーブルをラジオのアンテナ端子に繋ぐことで鹿児島・沖縄のラジオ放送を聴くことができようにしてあるが、そこまでしてラジオを家で聴くリスナーはほとんどいない。農業が主産業の島であるので、ラジオは畑で聴くことが多い。つまりラジオ沖縄などの沖縄のラジオを聴きながら生活していることになる。

奄美大島のケーブルテレビと異なり、徳之島・沖永良部島のケーブルテレビは基本的には公設公営メディアであり、ほとんどの住民が見ているテレビである。すでに指摘したように、そうした高視聴率のメディアが、隣り合う一方の自治体にはあり、他方にはない。住民の９割が見るようなケーブルテレビがある町とない町が隣り合っている。時間が経過するにつれて地域の映像アーカイブスという点での差が出てくるが、それ以上にどのような差が生じるのかこれからの地域メディアの意義を考えるうえで興味深いテーマでもある。

ケーブルテレビから考えさせられることは、「地域のなかにメディアがある」とひとことでいっても、地域のメディアの中にそれぞれ向きの違う放送が積層していることである。沖永良部では、東京からの放送。鹿児島からの放送。町の放送、そして沖縄からのラジオが積層している。それは、北（ヤマト）から来る放送と、地元放送と、南（琉球）から来る文化との積層でもある。奄美では、そうした放送文化の積層のなかで、住民がそれぞれを使い分けながら受容している姿がある。（取材：2015.9.10、2016.3.12）

４節　奄美の写真・ビジュアルメディア事業

●写真による奄美の記録・表現の始まり：芳賀日出男と奄美

地域におけるビジュアルな表現事業としてはケーブルテレビがすぐに思い浮かぶのだが、写真も含めたビジュアル表現の事業としては、写真家や写真館などの存在も含まれてくる。戦前、そして戦後、奄美のなかでどのような写真館が誕生したのかも興味深いテーマではあるが、そうした写真家・写真館が家族写真や商業写真以外に、メディア事業として島を表現するようになったのはそう古いことではない。

写真による奄美語りは、まず〈島外からのまなざし〉から始まった。奄美の民俗写真の記録として最も初期の作品群は、九学会連合調査に同行し

た写真家・民俗研究家の芳賀日出男氏（1921～）らによって撮影され公刊された。1955年の第1回調査は、7月中旬から一カ月間行われ、九学会連合（たぶん芳賀氏が担当したと思われる）側が5000枚と毎日新聞写真部員が4000枚撮影したという。この成果の一部250枚が、九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美の島々』（毎日新聞社1956発行）に収められている。また現在国指定重要無形民族文化財となっている「諸鈍シハヤ」も、戦後途絶えていたものが、この撮影のために復活して演じられたという。『奄美の島々』のあとがきには、毎日映画社から「奄美の島々」と題した16ミリフィルム3巻の記録映画も販売されていることが記されている（動画撮影がなされたのかは記録不明）。

1955年4月から1957年8月までの撮影は、その後、九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美　自然と文化　写真集』（学振刊）として刊行された（刊行年は不明、1958年ごろと推定される）。写真集の序には、調査委員会の名で、奄美を調査地に選んだ理由が次のように語られている。

> 奄美の島々は、日本の基層文化と南方文化との相関関係を明らかにする地理的・文化史的位置にある。…しかも過去においていく度か本土との交通が断たれ、また最近においても長く母国からはなれていた。そうした歴史的関係から奄美の文化は相対的に独自の発展をしている。…最後にわれわれの調査に際し…島の方々の心からなる御協力、さらに編集委員とくに高木宏夫・芳賀日出男良氏のはらわれた献身的努力に対して深甚の謝意を表する。(『奄美　自然と文化　写真集』序)

序の文からは、芳賀氏を含むこの時のチーム日本ともいえる学術調査団が、奄美を日本の基層文化と南方文化が交錯する場所と位置づけ、独自の自然と文化を育んできた歴史をもつ島を照らしだすという目的をもってい

たことが明確に語られている。奄美の本格的なビジュアル表現はこうした目的から始まったのである。

芳賀氏自身は、1962年に『そこに何かがある　秘境旅行』と題する写真・旅行の旅ガイドのような本を出版している（秋元書房　トラベルシリーズ43）。この新書サイズの旅行案内本は、北海道ノサップから沖縄久高島まで17の地域が紹介されているのだが、表紙裏の写真だけのページは全15ページ全ての写真が「南の果て奄美群島」と題した奄美の写真である。そこには芳賀の奄美への強い思い入れを読み込むことができよう。その「南の果ての奄美群島」の解説に芳賀は次のように書いた。

> 私はこのかずかずの島をめぐって百八十日ほどをすごした。島の村人と語りあい、写真を写した昼や夜の思出を、今なお忘れえない。日本人の人なつかしさを、今なおひそめているような気がするからだ。アマミキヨというこの群島の女祖神は、島人に本土の人たちの知らない生きる楽しさをわかち与えたのだろうか。（『秘境旅行』、1–2頁）

奄美群島のなかで、秘境として芳賀氏が選んだ島は、沖永良部島である。「南海の亜熱帯、珊瑚の島　沖永良部島」と題された章のなかで、次のように島について語っている。

> 古生層の島には島人が何よりもおそれている毒蛇ハブがいる。珊瑚礁の島には一匹もいない。だから島民は夜明けから日没まで野良で働き、青年が夜蛇皮線やギターでセレナーデを鳴らして村の少女達を散歩にさそう。…奄美群島は日に日に新しくなりつつあるようだ。私は沖永良部島の近代化に期待する。おそらくそれは島の人の生活を豊かにし、孤島苦のわびしさからも解放されるだろう。その日になっても、

俗悪に染まらない珊瑚礁の島の風向の美しさ、旅人を素直に迎えてくれる村人のやさしさがかわらないことを望みながら。（昭和三十、三十一、三十二年調査）（243 頁）

さらの後、芳賀氏は奄美で刊行された公式観光ガイドブックともいえる『ホライゾン』に「シマを撮る」と題した寄稿を連載している。2 号には、「群倉よよみがえれ」と題して、当時の感動を語っている。

昭和三十八年八月の末、私の大和村大和浜の群倉の前に立った。屋根を連ねて建ち並ぶ高倉の見事さ、その下では稲刈り脱穀がはじまっている。働く島人の喜びの唄声が聞こえてきそうな風景を、私は感動しながらカメラにおさめた。その後、この写真は様々な出版物に何回も、くりかえし掲載されてきた。…奄美にはこのような生きている古代文化の宝物がまだまだあるはずだ。（『ホライゾン』VOL.2、1995、16−17 頁）

つづく、3 号では「一重一瓶」という文を寄せて、奄美の美風を語っている。

夕映えの西陽が南海の地平線に沈みかかるころ、吹き寄せる風が涼しくなった。三線がひかれ、島唄がはじまる。少女が扇を開いて踊りだした。こんな時の流れを至福というのだろうかと、私は南の島に来た喜びを知った。…奄美の家毎にある心のこもった一重一瓶の美風を失いたくない。（『ホライゾン』VOL3、1996、8−9 頁）

芳賀氏のこうした奄美をめぐる島語りの表現には、〈島外からのまなざし〉のある意味での典型例でもある。そこには、戦前の沖縄における方言論争のような民俗学の視点からのある種の懐古趣味や農本主義、さらにオリエンタリズム（東洋趣味・古代日本の原像としての南島文化趣味）のようなものが感じられないわけでない。近代化されない残基としての南島、あるいは秘境、そうした語り口調は今日もつづく、都市が離島をまなざす際の本源的な文化消費の欲望である。それは、自然と人間の有機的な結びつきが残っている文化に憧れるというロマン主義の系譜に属する。こうしたロマン主義的な志向は、精神的な世界と身体表現とを結びつけることで文化消費の裾野を全国的に拡大してきている。

地域のメディアの存在意義ということに立ち返って考えてみた場合、今日大事なことは、そうしたロマン主義的な〈島外からのまなざし〉にもとづくメディア表現が間違っていると主張することではない。大切なことは、今日まで続く、観光客から研究者をも虜にする〈本源主義への憧憬〉〈ロマン主義的憧憬〉による島語りだけではない、〈島内のまなざし〉によるメディアが必要だということだ。島人自身による島語りの文化装置としての地域のメディアが必要であり、そうした二つのまなざし間の相互作用・相互浸透がこれから螺旋的に島の語りを増幅させていくということだ。われわれが、島語りの〈表出の螺旋〉の構造に着目しているのもそのためである。

●松田幸治と写真集・観光ガイドブックの発行

○〈奄美初の民間写真集について〉

芳賀氏の少しあとに、同じように島外者ではあるが、奄美に魅せられた写真家がいる。広島で商業写真の仕事をしていて、35歳の時に家族とともに奄美に移り1974年から3年半沖永良部島に住んで奄美の写真を撮り続けた松田幸治氏（1938～）である。松田幸治氏は、移ってから1年後の1975年には『奄美の世界』と題した写真集を西日本新聞社から出版して

いる（取材：2016.07.25、2016.08.17）。

写真集の帯には、宮崎在住の詩人である南邦和の言葉が寄せられている。

> 海鳴りの底から生まれた136点（カラー）
>
> 奄美の自然は，確かに美しく、見るものをしてある旅立ちを決意させるほど魅惑的な一面を持っているが、生活者としての眼でそれを捉えるとき、この自然は、貧しく、厳しく、またいとおしい、日常的な襞をあらわにする。島での生活と同化への心情が、奄美の古代文化への関心となり、この一冊に結実したと言える。　－－　南邦和（詩人）（本の帯より）

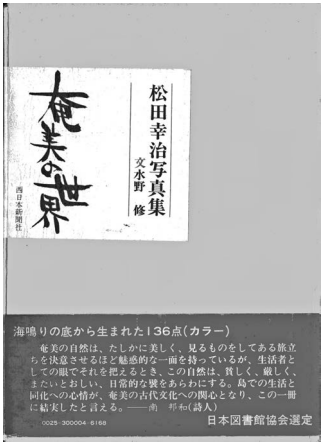
この写真集は、芳賀氏の『秘境旅行』から13年後。沖縄返還（1972）やオイルショック（1973）を経た時期の出版である。松田氏はあとがきのなかで、その思いを以下のように語っている。

> 奄美は今もなお古い日本の姿を残し続けている。しかし、ここ数年の生活様式の変化と過疎現象はひどく、古俗は急速に失われつつある。…南へ来ると私は心のやすらぎをおぼえる。海は碧く、太陽はかがやき、花は咲きみだれ、果実は豊富だ。人情は厚く、私たち旅人にも親しくほほえみかけてくれる。私はこの奄美に残存する古代文化を求め約一ケ年、目で見、耳で聞き、足で歩いて記録しつづけてきた。（『奄美の世界』あとがき）

松田氏によれば、当初奄美大島への転居も考え準備を進めていたが、子供達のことを考えてハブのいない島として選んだのが沖永良部島であっ

た。和泊町に借家を借り、以後3年半、奄美群島各地の写真を撮り続けた。そうした写真は、島を訪れていた鹿児島県立短期大学で奄美を研究していた長澤和俊氏（東洋史研究者）の目にとまる。長澤氏が当時在籍していた鹿児島県立短大には当時「南日本文化研究所」があり、所長の長澤氏が編者となって1974年に西日本新聞社から『奄美文化誌－南島の歴史と民俗－』が出版されていた。そうした縁から松田氏が西日本新聞社に知己をえて出版したのが、『奄美の世界』（2000部）である。4,000円という当時では比較的高価な本であった。

九学会連合奄美大島共同調査委員会の『奄美　自然と文化　写真集』から17年あまりを経て発刊されたこの本は、本格的な奄美の写真集としては二冊目の本である。九学会の本が特殊な学術書であることを考えれば、一般書としては初の奄美写真集といってもよい。当時、このような本はなかったという。



写真：『奄美の世界』の表紙（提供：松田幸治氏）

○〈キャリアといきさつ〉

松田氏は、広島の人である。その意味では〈島外からのまなざし〉によるメディア事業とも言えるのだが、沖永良部島・鹿児島と合わせて十年間ほど奄美や屋久島・種子島との関わりをもっているので、単純に〈島外からのまなざし〉とはいえない。松田氏の奄美・鹿児島在住は、九学会連合の1975年から79年まで続く第二次奄美調査（第一次調査は1955年～58年）の時期と重なっており、現地案内などを通じて研究者や地元郷土史家らとさまざまな親交があった。前述したように、第一次調査は写真家芳賀日出男氏との関わり生んだが、第二次調査は写真家松田氏との関わりを生んだのは興味深い。氏は、こうした交流を通じて奄美や他の島々の生活や文化を研究し自身の壮大な日本文化論を深めている。そうした知見にもとづく被写体に対するまなざしは内在的であり深い。

1938年　：広島で生まれる（小中学と山口県での疎開生活を体験）
1957年　：日本写真専門学校（大阪）
1959年～：広島での広告代理店勤務・フリーのカメラマン
1974年　：家族（妻・子供2人）を連れて沖永良部島に移住（36歳）
1977年　：鹿児島に移住（1980年頃、個人出版から南國出版へ変更）
1984年　：広島に戻る（10年間の「南西諸島放浪の旅」（本人の記述）が終わる）
1987年　：喫茶店「南蛮茶屋」開業（現在に至る。南國出版も継続している。）

どのようないきさつで松田氏が奄美に転居し写真集を出すことになったのか。氏の語るところによれば、以下のような経緯である。松田氏は、広島で生まれたが戦争疎開や父親の転勤などで宮崎・大阪などを転転とした。高校卒業後、大阪の日本写真専門学校（現在の日本写真映像専門学校）で写真技術を学んだ後、広島にもどり地元の大きな広告代理店に勤め、さらに独立したフリーのカメラマンとして家族を養っていた。高度成長期の日本で、サラリーマンの収入の3、4倍程度の収入はあったという。

しかし30代半ばになり、そうした商業・依頼写真の仕事に見切りをつけて、たまたま観光で立ち寄ったことのある奄美に魅了されて、オイルショックの翌年の1974年2月にある程度の自己資金をもって家族と奄美に転居する。取材用の軽のジープと当時の奄美には1台もなかったマツダのロータリーエンジン搭載車を島に持ち込んでいるから、そうとう目立った島入りであったことが想像される。氏は、後に自伝冊子の中で奄美入りという人生の転機について次のように書いている。

> 仕事といっても発注先の言いなりのものしかなく、三十代半ばになると、何となく、バカらしくなってきた。このままでは、一地方都市のカメラマンで人生が終わってしまう。何か、後生に残る仕事をするには、子供の小さい今しかない。こう考えた私は、昭和49年2月に、突然、琉球文化圏の一つの島である沖永良部島へ女房子供を連れて移住したのである。（松田幸治、2016、2頁）

転居する2年ほど前、たまたま観光で訪れたのが奄美との最初の出会いで、「ここは日本か？」と思うほどのカルチャーショックを受けたという。当時、沖縄は写真家東松照明が手がけており、ならば自分は奄美へという思惑もあり、奄美に移り住む決意をしたのである。

○〈観光ガイドブックの出版事業へ〉

松田氏は、その後、広島での広告関係の仕事の経験を活かして、写真をベースにしつつ、地元郷土史家への依頼原稿を盛りこんだ独自の観光ガイドブックスリーズ『南の島々シリーズ』（全7巻）を刊行する。最初の頃の出版は松田幸治の個人名で、鹿児島に居を移してからは南國出版という出版社名で発刊している。印刷は広島でおこなっている。南國出版は、現在も広島の氏の経営する喫茶店「南蛮茶屋」に所在地があり、日本書籍出

版協会のデータベースに登録されている。（その意味では奄美の出版・印刷のメディア史にも書き加えねばならない事業でもある。写真をベースにしているということから、とりあえず、ビジュアル事業として本稿で紹介しておく。）

この観光ガイドブックは、高画質のカラー写真に加えて、さまざまな項目についてかなりの文字数の郷土史家による記事が掲載されていて読み応えがある。依頼原稿には全て原稿料を払ったという。読み応えという点では、『るるぶ』『まっぷる』に代表されるイメージ先行型の現代のビジュアル系観光ガイドとはかなり異なっており、〈島内からのまなざし〉による奄美語りといっても過言ではない[4)]。

松田氏は、出版した刊行ガイドブックを，日本地図共販（株）を通じて流通に乗せてもいるが、通常は書店ではなく奄美航路のフェリーの売店や島内の土産物店という独自の販売ルートを自ら開拓している。その意味では、氏の観光ガイドブックの出版事業はひとつのビジネスモデルの開拓でもあった。与論島、沖永良部島、徳之島、奄美大島、喜界島と島毎の観光ガイドブックは、奄美初のものであり、「他所から来た人が、いいものを作ってくれた」と評価されたという。広告も多いが、掲載広告料をとらずに、数十冊を買い取ってもらうような形で普及を図った。自治体の長が訪問者へのお土産用に購入したり、東京・大阪の郷友会がまとめ買いしたりと、新版、最新版と版を重ね、100 冊単位で部数が掃けたようである。ちなみに、与論島は 1973 年沖縄の日本復帰前後に一大観光ブームがあり、累計で 25,000 部、他の島のものもそれぞれ累計 10,000 部ほどは印刷したという。

氏は、奄美群島の後は、1977 年に鹿児島市内に居住して種子島・屋久島に通いつめ、それぞれのガイドブックも出している。鹿児島には 6 年半ほど居住しているが、その間に、奄美のガイドブックシリーズの改訂を行ったりしながらその販売で生活を支えていた。その後、広島に戻ってからは「五島列島～自然と文化～」も手がけている。五島列島のガイドブックは

長崎からのフェリーの売店でも販売した。

沖永良部島からはじまり屋久島までは「観光ガイドブック」、その後の種子島・五島列島のガイドブックでは「南の島々シリーズ」と銘打っているが、「自然と文化」というサブタイトルは変わらない。このサブタイトルは、九学会連合調査の写真集のサブタイトルと同じである。こうしたサブタイトルへのこだわりからも、南島文化・離島文化への氏の関心やこだわりを垣間見ることができる。

松田氏が奄美を起点に行ったメディア事業は、写真家が自ら制作した本を販売する出版社を立ち上げるという全国的にも珍しい事例である。1976年に地方・小出版流通センターをたちあげた川上賢一は、『「地方」出版論』（1981）のなかで松田氏の出版について次のように紹介している。

> 九州は、各々の県が独立した気風を持ち、特色のある出版社が多い。鹿児島は春苑堂書店出版部が出版点数が多い。同地に所在する南国出版は写真家松田幸治氏の運営するもので南島の写真入りガイドブックを刊行している。同じく道の島社は創立間もない出版社で奄美大島の料理の本を出し、奄美でたちまち売り切れてしまったという。（『「地方」の出版』、24頁）

『「地方」の出版』で紹介された道の島社については別稿でも紹介した。1980年に『シマヌジュリ：奄美の食べものと料理法』を出し1986年まで鹿児島を拠点に出版活動をしていた出版社である。松田氏は1984年まで鹿児島にいるので、同じ鹿児島市内で二つの出版社が互いに面識のないまま奄美関係の本を出版していたことになる。

松田氏以外に奄美の観光ガイドブックを発刊した事例としては、公的な機関である奄美群島観光連盟が1980年度事業として発刊した『奄美群島観光ガイドブック』（1981.3）がある。この本は、233頁に及ぶ厚いもので

あるが、ほとんど名所旧跡のリストとデータ集によって構成されていて、一般の人が購入して読むことを想定したようなものとは思われない。その後の奄美群島刊行連盟のガイドブック発刊は、島でたちあがったホライゾン編集室が担っていくことになる（ホライゾン編集室のメディア事業については、「歴史・印刷メディア編」で紹介した）。

別稿で紹介したように、奄美ではホライゾン編集室によって1980年代後半から7年間『奄美ネシア』が発刊され、それを引き継ぐかたちで『奄美の観光情報誌　ホライゾン』が1995年から2015年まで年に2回のペースで40号まで発行された。またその間に、独立した冊子として『奄美群島観光ガイドブック』が1999,2001,2009年に発行されている。後で紹介する島内出身の写真家の浜田太氏の写真をふんだんに使い、島外出身で東京の大手出版社での勤務を経験してきた浜田百合子氏というプロの編集者が手がけた観光ガイドの誕生でもあった。

ちなみに、奄美の草分け的な観光用フリーペーパーの『奄美探検図』が発刊されたのが1988年である。現在奄美大島内でもっとも目にすることが多いフリーペーパー『夢島』は2007年である。

こうした観光ガイドの発刊経緯を少し振り返っても、奄美は1980年代後半までは観光ガイドブックが少ない穴場的な場所であったことがみえてくる。そこに、松田氏の1974年からの10年間に及ぶ奄美群島、種子島・屋久島の「自然と文化」シリーズの独自性とビジネスチャンスがあったといえよう。

表４：松田幸治の出版事業

発行年	書　　名	著　者	発　行
	【沖永良部島和泊町居住の時期】		
1975.9	松田幸治写真集　奄美の世界	松田幸治	西日本新聞社
1975.9.25	観光ガイド.ブック　沖永良部島～自然と文化～	松田幸治	松田幸治
1976.3	観光ガイド.ブック　徳之島　　～自然と文化～	松田幸治	松田幸治
1976.5	観光ガイド.ブック　与論島　　～自然と文化～	松田幸治	松田幸治
1976.7	観光ガイド.ブック　奄美大島　～自然と文化～	松田幸治	松田幸治
1977.5	観光ガイド.ブック　喜界島　　～自然と文化～	松田幸治	松田幸治
	【鹿児島居住の時期】		
1977	与論島、徳之島を増刷り	松田幸治	松田幸治
1978	奄美大島、与論島、徳之島を増刷り	松田幸治	松田幸治
1979	刊行ガイドブック　屋久島～自然と文化～	松田幸治	松田幸治
1980.4.20	奄美大島（最新改訂版）	松田幸治	南國出版
1982.5.1	与論島（最新改訂版）	松田幸治	南國出版
1982.8.1	屋久島（最新改訂版）	松田幸治	南國出版
1982.12	南の島々シリーズ　徳之島の闘牛	松田幸治	南國出版
1984.2.11	南の島々シリーズ　種子島～自然と文化～	松田幸治	南國出版
	【広島に戻って以降】		
1986.5.1	日本の島々シリーズ　五島列島～自然と文化～	松田幸治	南國出版
1996.6.15	松田幸治非小説集成「島の生活」	松田幸治	南國出版
2004.2.11	松田幸治非小説集成Ⅱ「闘牛研究」	松田幸治	南國出版
2007.3.15	松田幸治非小説集成Ⅲ「島を語る」	松田幸治	南國出版

松田氏の観光ガイドブックの起点は、『松田幸治写真集　奄美の世界』にあるが、それは九学会連合の第一奄美調査時に刊行された写真集から17年後、コシマプロダクションの設立の3年後ということになる。次に紹介する越間誠氏の二つの写真集でも、1960年代後半から70年代半ばの写真が数多く掲載されている。越間誠氏が、変わりゆく時代という課題意識から古い民俗的な景観にフォーカスを当てたことを考えると、高度成長からオイルショックを経験するこの時期の奄美は、古さと新しさがせめぎあう社会変容のなかで、民俗的な記録にとっての大きな分岐点であったと想像される。

繰り返すが、奄美に数年間在住し、奄美と深く関わった松田氏の目線は、単なる〈島外からのまなざし〉のそれではなく、〈島内のまなざし〉と対立してあったわけではない。むしろ、そうした島外者による奄美に内在しようとした表現が刺激となり、島人・U ターン者による島発見という形でのメディア表現が展開されていく。次に紹介する越間誠氏は、芳賀氏の次の世代として島の中に留まり続けながら、島の人々と意識を共有することで、より内在的に、島の民俗的風景や変わりゆく島の姿を記録し続けてきている。

○〈その後の南國出版と「しま」を語る会〉

最後に、松田氏は、現在も広島市内で喫茶店「南蛮茶屋」を営む傍ら、南國出版を続けている。以前は、この喫茶店を拠点に、「『しま』を語る会」や南島研究会を主催し、旅の冊子「しまリポート」を年に数回発刊し、店は一時、広島の島に興味のある人々の文化サロンのような場所であった。「『しま』をかたる会」の誕生前夜については、自費出版の小冊子『正史南蛮茶屋物語』で次のように語っている。

> 沖縄・奄美の琉球文化圏では、自分の生まれ育った集落を、私の「しま」と言う。そこか完結した世界である。小宇宙である。「しま」を語る会は、ミクロ的・マクロ的・生活空間を旅した感想を語り合う場である。平成五年秋に地球的規模でのネットワークづくりを目指し、「地球トラベラーズクラブ」と改称した。（松田幸治、1977、40 頁）

そうしたサロンに出入りしていた一人で奄美地方の方言禁止について研究していた日本語史研究者の西村浩子氏（松山東雲女子大学・教授）は、『松田幸治非小説集成Ⅲ　島を語る』（南國出版）に次のような抜を寄せている。

松田さんは、島で長い時間を過ごし、島の日常的な営みの中で島内外の知識人・研究者と交流してきた。その時間の中で、黒潮の影響を考えさせる諸々のものを、その眼で見、耳で聞き、肌で感じ取って、確信したのだろう。その確認によって本書は生まれたと思う。今、私は松田さん自身が、黒潮だと思う。…黒潮の親玉は、多芸多才である。…松田さんの黒潮は止まらない。南蛮茶屋という潮の流れは、止まらないのである。（松田幸治、2007、75 頁）

南國出版として出す本以外に、自費出版として様々な本を出している。『正史南蛮茶屋物語』（1997）や、南蛮ツイッターカフェシリーズとして、『ちょいと通信』（2014）、『平成らくがき帖』（2014）、『流れ星通信』（2015）、『十六夜百合通信』（2016）等を出し、さらに『老人病「白内障」を超えて』（2010）や自伝ともいえる『独居下流老人の「家計簿」』（2016）などを出し続けている。

●奄美初の映像プロダクション：越間誠とコシマプロダクション

驚くべきことに奄美には、映像制作のプロダクションがある。個人事業ではなく、会社として自社ビルをもち 10 人近いスタッフを抱える制作会社である。写真家でもある越間誠氏（1939～）が創業したコシマプロダクションである。通常こうした映像制作会社は県庁所在地や地方の大きな都市にしか存在しないことを考えれば、そうした企業が島にあるということ自体が驚異的であり不思議なことでもある（取材：2013.3.11）。

創業者の越間氏は、島出身者であり島を出ることなく活躍してきた、まさに〈島のまなざし〉を体現した写真家である。氏は、『奄美　二十世紀の記録』（2000）、『奄美　静寂と怒濤の島』（2002）という非常に優れた民俗写真集を出版していることで知られている。奄美の文化を撮ることに焦点を当てた表現者としては、芳賀氏の次の世代の写真家であり、前述の松

田氏とはほぼ同じ世代（生年で1年違い）の写真家でもある。

また、写真だけではなく、映像で撮られた奄美の祭りや自然景観をプロダクションからDVDパッケージとして販売もしている。役所の奄美に係わる映像制作なども手がけてきているので、いわば、奄美の映像記録の膨大なアーカイブスを保持している事業者ということになる。ケーブルテレビが、放送用の記録であるのに対して、それらは民俗写真家としての強い視点をもって撮られた写真・映像のアーカイブスである。

紬事業の家に生まれた越間氏は、名瀬市役所勤務の時に趣味の写真の技術を磨き、その写真の腕をもって地元の南海日日新聞に写真担当の記者として入社している（1964）。その後、南日本放送の嘱託名瀬市局長（1969）を経て、1972年に株式会社としてコシマプロダクションを設立している。経歴からすれば、南海日日新聞のあとに、いわばフリーランスの写真家として独立したことになる。「人が好む写真ではなく、自分が好む写真を撮りたい」という思いがあったという。

氏は、南日本放送の通信員として映像の腕を磨く。そうしているうちに奄美に民放が放送されるようになり、コマーシャルも営業・制作するようになり、やがて、コマーシャルで一本立ちということで、自らのプロダクションを興したという。この創業年である1977年は、写真家の松田氏が奄美から鹿児島に転居した年でもある。また、フィルムからビデオに代わっていく時期でもある。また奄美の基幹産業の大島紬が全盛で、コマーシャル制作の営業がやりやすい時期でもあった。

越間氏はコマーシャルや請負の記録映画などのほか、民俗映像の記録保存にも力を入れていく。それは氏のライフワークでもあるからだ。その奄美の文化を記録し発信し伝えていくというミッションは、まさに奄美の〈文化媒介者〉のそれである[5)]。

氏の写真集には、よくその現場に入り込んで撮れたと思わせる、古い奄美の生活の貴重な写真が並ぶ。それらは島に住む同じ生活者として、島の人々と意識を共有することで撮影できた貴重な奄美の記録である。氏は、

単なる形の記録ではなく、「祭りに象徴されるような人の祈り、願い、神への畏敬と感謝、そうした精神世界を表現できたらいい」とその思いを語る。「風土性をもっと濃密に記録された形のものを撮りたい」とも。

奄美に生きている人の喜び、哀しみ、苦悩がにじみでるような写真。氏が目指したのは、そうした奄美の生活と精神世界を表現するようなビジュアル記録である。

越間氏は、『奄美　二十世紀の記録』（2000）の「私の伝えたいこと－あとがきに代えて」で、その撮影のスタンスを次のように書き表わしている。

> この写真集は1959年から2000年までおよそ四十年間にわたる奄美群島の記録である。…五穀豊穣、豊作と無病息災などを神に祈り、感謝する奄美の祭り。いま稲作の衰退や人の志向の多様化、過疎、高齢化などにより伝承の危機にある。その中でも祖先から受け継いだしきたりを守り抜こうとする人たちがいる。…本書はいわば奄美の四十年の一つの断層である。そして風景や祭、人の暮らしなどを現象のみでなく、願わくば、それに関わる島人の心の絆、神への祈りと感謝、そしてしたたかな生命力を、いささかなりとも感受していただけたらと願う。（『奄美　二十世紀の記録』、214頁）

また続く2年後に刊行された『奄美　静寂と怒濤の島』（2002）の「島を撮る、レンズの内と外－あとがきに代えて－」では次のように語っている。

> 人が生き、安寧と豊かさを願って神に祈る。喜びや悲しみ、また、いさかいが絶えないこの世のうねりの中で、思いやり、悲しみの心、頑張る力。人間のみならず世の万物の息吹、ドラマを見つめ、それら

の姿を、写真に撮るという行為を通して人々に伝えていくことができるならばと願っている。（越間誠、『奄美　静寂と怒濤の島』215 頁）

越間氏の語りからは、奄美への強い思い、奄美を撮ることの強い自覚のようなものを読み取ることができる。そうした思いは、写真という個人の趣味を起点にしながら、次第に商業写真・映像を撮ることを生業とするメディア事業へとひろがっていったにも関わらず、氏の奄美への“まなざし”（誰が誰のためにメディア表現するのか）の通奏低音となっている。

また越間氏が撮影した奄美の映像は、前述したようにコシマプロダクションから販売されている。奄美に関する映像作品は、中央電化やセントラル楽器などでも制作販売されているが、網羅的な内容・分量という点では、出色の活動実績である。一つの島にこれだけのメディア表現事業があったことは、新聞・活字とは違った意味で貴重な映像文化を残したことになる。ジャンルは、①芸能・祭、②観光・産業、③民俗・振興・伝説、④奄美の達人達に分けられている。販売作品では各集落の八月踊りが多いが、他には島唄や芸能祭のライブ映像などが並んでいる。単発時な映像作品の販売はあるが、これだけシリーズで作品をつくり販売するのは、映像事業がなければできない活動である。その意味でも奄美に映像プロダクションがあること。それは奄美にとっても幸せなことである。代表的な作品を紹介しておこう。

表５：コシマプロダクションが販売している映像 DVD（HP より作成：2016.7.20）

発行年	タイトル	概要
1990	シマのムンバナシ	奄美大島の伝説や伝承を古老に取材
1990	奄美の民間節話　Vol.1　Vol.2	奄美の説話伝承（昔話・伝説・神話）
1990	砂糖の勝手世騒動　丸太南里	砂糖の自由売買運動の指導者
1991	奄美の衣・食・島のくらしと人と	奄美の衣・食・住などの風土の暮らし
1991	島唄探訪	有名唄者による野茶坊の住みか探訪
1992	奄美のしまうた　名人大競演 ‘92 沖縄ライブ	奄美の島唄名人 21 人による沖縄ライブ
1992	日本復帰の父　泉芳朗	復帰運動の指導者
1993	ウル島・奄美　ニライからの贈物	奄美各地の伝統漁法
1993	奄美　島じまの風景	群島の見所・風物・産業など
1993	奄美が生んだ世界の法学者 泉二新熊博士	奄美が生んだ法曹界の先駆者
1994	六調　奄美・佐仁の手踊り唄	佐仁に伝承されている手踊り唄
1994	柔道に生きた　徳　三宝	徳之島生まれ。講道館の鬼と言われた
1995	響（とよ）め太鼓	太鼓をテーマにした芸能交流の記録
1995	龍郷の八月踊り　各集落編	龍郷町の八月踊りを集落ごとに編集
1995	芦検の豊年祭　待ち網漁	芦検集落の豊年祭と古式漁法
1996	奄美民謡　徳之島のしまうた	徳之島の唄者２人の競演
1997	大島紬育ての親　丸太兼義	大島紬育ての親
1998~	宇検村の八月踊り　各集落編	宇検村の八月踊りを集落ごとに編集
2000	祭りの唄がきこえる ～奄美の祭りと芸能～	群島各地の祭りや芸能の紹介
2001	奄美の八月踊り ～笠利町佐仁～第１集・第２集	笠利町佐仁集落の八月踊り 13 曲
2006	石原久子の島唄「なつかしゃ」	石原久子の島唄のＤＶＤ
2009	石原久子の島唄「うむい（想い）」	宇検・奄美の風景･祭りと島唄

コシマプロダクションは、現在、東京のテレビ局で仕事をしてきた子息が帰省して業務を継いでいる。東京時代のキャリアを活かし東京のテレビ局の仕事も引き受け、奄美と東京を行き来しながら業務を営んでいる。奄美のメディアが、奄美群島内だけではなく、外部の仕事を併用して成り立つ。島内の市場が限られているとはいえ、そうした事業の成り立ち自体が興味深い。

●アマミノクロウサギの子育て発見者浜田太と映像事業

われわれはこれまで、さまざまな表現活動を通じて奄美の自然・文化・社会をミッションをもって発信していく担い手を〈文化媒介者〉と名付けてきた。そうした一人として、同じ写真家でもあるホライゾン編集室の浜田百合子氏の夫でもある浜田太氏(1953～)を挙げないわけにはいかない。浜田氏もまた島出身者として奄美に強いこだわりをみせる〈島内のまなざし〉の体現者である。奄美大島の龍郷町出身の浜田氏は、東京の写真大学を卒業後に講談社写真部勤務やフリーカメラマンのキャリアを経て奄美に帰省し、1980年に営業写真を生業とする写真スタジオである浜田太プロスタジオを開業する。このスタジオから後に夫人の浜田百合子氏が運営する「ホライゾン」編集室もたちあがり前述した『ホライゾン』が発刊されている。浜田氏は結婚式などの商業写真の傍ら、奄美の自然と文化を撮り始める（HPより)。奄美の観光情報誌をうたい文句にした「ホライゾン」の企画制作を1995年にスタートさせ、翌年の1996年には有限会社浜田太写真事務所に社名を変更している。浜田氏は「もうひとつの郷土史」といえる雑誌「ホライゾン」の写真撮影をするかたわら、アマミノクロウサギというライフワークと出会い、アマミノクロウサギの生態を写真や映像で記録し研究者として活躍していく。ホームページの印刷部門には、浜田太写真事務所とホライゾン編集室が並んでいる。

浜田氏は、写真家として奄美に在住しながら次々に写真集や印刷物を出すことで奄美を発信してきた。

表６：写真家・浜田太の主な作品集（HP から作成）

発行年	タイトル	出版社
1994	写真集「TROPICAL～奄美から南風～」	小学館
1998	写真集「時を超えて生きるアマミノクロウサギ」	小学館
2000	「生命をめぐる島·奄美」（共著）	南日本新聞社
2001	「奄美ネリヤカナヤの人々−村−」	南日本新聞社
	「奄美群島観光ガイドブック」	ホランゾン編集室
2004	写真集「奄美 光と水の物語」	小学館
2012	「奄美の食と文化」	南日本新聞開発センター
2015	「糧は野に在り」（共著）	農文協

また、アマミのクロウサギの生態を追う動物写真家として、テレビ局のテレビ番組の撮影に協力するだけではなく、浜田氏自身が主役で出演するテレビ番組なども作られている。その意味では浜田氏はまさしく奄美を代表する写真家であり、また全国的に知名度をもつ写真家ともいえよう。コシマプロダクションの越間氏が、〈島内のまなざし〉に徹底的に準拠し奄美の生活世界の泥臭さにこだわった優れた民俗写真家であるとすれば、浜田は優れた動物写真家であるだけではなく、東京的＝マス・メディア的なまなざし＝フレームと接合・共振しやすいセンスと回路、その意味で〈島外からのまなざし〉を兼ね備えた優れた写真家でもある。（浜田氏のアマミノクロウサギの子育て発見と NHK との関わりは、別稿「奄美の地域メディアを俯瞰する：島外メディア編」でとりあげた。）

この東京＝〈マス・メディアとの接合・共振の回路〉は、奄美からの情報発信を考えるときに忘れがちな回路の一つでもある。奄美情報は、奄美内で地産地消されるだけではなく、奄美情報は、東京・マスコミを経由して、島外の一般の視聴者・読者のまなざしに消費される。すでに指摘したように、この回路の存在は地域のメディアを考察する際にしばしば忘れられがちな側面でもある。

表７：浜田太が撮影・出演するテレビ番組（HP から作成）

放送年	出演･撮影など	局など
1999	「TV 生きもの地球紀行 始めて見る奄美のクロウサギの子育て」撮影を担当	NHK
2001	「素敵な宇宙船地球号」	テレビ朝日
2003	「地球ふしぎ大自然 奄美太鼓の森・なぜ生き残った黒ウサギ」制作	NHK
2007	「浜田太 アマミノクロウサギ 神秘の生態に挑む」	NHK
2011	「奇跡の地球物語 生きた化石を撮る」	テレビ朝日
2013	「ダーウィンが来た! 珍獣アマミノクロウサギ びっくり子育て術」	NHK
2013	「どーんと鹿児島 いのちの島 奄美」	南日本放送

浜田氏は琉球新報の「落穂」欄に寄せた記事（2002）で、奄美の価値への自問とアマミノクロウサギとの出会いを次のように述べている。

「地元の人がこれじゃな…」旅人に言われたことばである。…私は「奄美は何処に行ったらおもしろいですか」と尋ねられ、咄嗟に「奄美におもしろいところなんてありますかね」と答えてしまったのである。そして、冒頭の言葉が返ってきたのである。（琉球新報、2007.7.11）

そして、1986 年 7 月のある日、家族で名瀬市の近郊の大浜海岸で夕日を眺めている時、頭をよぎったのか「アマミノクロウサギに会いたい」だった。…奄美の森にはケンムン（キジムナー）が棲んでいると言われ夜に森に入る人などいない頃だった。

…林道の真中に何やら黒いかたまり見えてきた。ゆっくり車を進めるとライトで目がルビー色に光った。「アマミノクロウサギだ」思わず叫んだ。全身に鳥肌が立ったことを今でもハッキリ覚えている。人との苦い出会いとアマミのクロウサギとの出会いがその後の私の人生を決定付けたのだった。（琉球新報、2002.7.11）

浜田夫妻の大きな貢献の一つは、奄美の森の価値を発見し発信したことにある。二人が1991年に制作した奄美の神秘的な雰囲気の森の中にモデル女性が立っているポスター（写真）は、コーラルな海だけではない奄美の森の魅力をビジュアルに表現したことで知られている。浜田氏は、奄美の森の魅力を次のように語っている。

白い砂浜と美しいサンゴ礁に彩られたこの島は、実は85パーセントも森の木々に覆われているにもかかわらず、悪名高いハズの住処と恐れられていて人の出入りはあまりない。…このような豊な森は、水という血液で育まれ、川の生き物に養分を与え海へ流れ出る。そして豊かな海もこの水によって育まれているのである。奄美の森と海の豊かさを、アマミのクロウサギが私に教えてくれた。（琉球新報、2002.7.25）

写真：奄美の森の価値を知らしめた記念碑的作品（提供：浜田太写真事務所）

またこのポスターについて浜田自身が次のように説明している。

> 91年末、このヒカゲヘゴの中にモデルを入れた観光ポスターを発表した。朝霧に包まれたヒカゲヘゴの中で妖精がおいしい空気を吸っているというコンセプトだった。発表されるやポスターがあちらこちらで盗まれ話題になった。（琉球新報、2002）

一枚の写真が奄美の再発見につながる。それは島のアイデンティティの再生でもある。メディアはまさしく物語装置であり、文化装置でもあるからだ。

こうした奄美の森の価値の代弁者であり、アマミのクロウサギの写真・映像作家以外に、浜田氏にはもう一つのメディア事業者としての顔がある。エアポートTVネットワークジャパンとしての映像表示装置設置事業者としての顔である。このため2005年に、有限会社エアポートTVネットワークジャパンに社名を変更している（2008年に株式会社化）。ホームページには、空港スカイビジョン、オーロラビジョン、沖縄情報TVの入口が並ぶ。空港スカイビジョン、沖縄情報TVは、奄美空港、鹿児島空港さらには沖縄の空港などの荷物受け取り場や待合室におかれている観光ガイド用のモニターシステム事業である。ご当地の映像・広告がリピートで表示される。テレビ放送という形や、DVD販売という形ではないが、奄美の映像の表現事業であり、観光客にとっては、島に到着して最初に出会う奄美映像でもある。オーロラビジョンは、奄美市内のビルに取り付けられた大型の映像表示装置である。このテレビ事業が語り示しているのは、奄美という鹿児島の離島に位置しながら、鹿児島・沖縄での映像事業への展開していくビジネスの痛快さでもある。

コシマプロダクションも、エアポートTVネットワークジャパンも、島のひとつのファミリー事業ではある。その事業が、島の限られた経済圏

を超えて外部との接続のなかで事業を展開する。われわれではそれを〈マス・メディアとの接合・共振の回路〉と名づけてみた。それは限られた経済エリアの制約が生んだ逆説であるかもしれない。地域には、地域メディアという単純なジャンル内にあてはまるメディア事業があるのではない。浜田氏のケースは、地域のメディアは“地域外とのネットワーク”のなかで、つまり〈マス・メディアとの接合・共振〉の回路を持つことでより持続的に成立し、それによってより広域での地域語りが可能になることを示唆してくれる。

4節　小括：かたる・つながる・つくる・ひろがる

本稿では、奄美群島におけるテレビ放送事業とビジュアルメディア事業を俯瞰してきた。これまで、そして今、写真や映像を通じて、奄美がどう表現されてきたのかの一端を提示できたのではないかと思う。本稿も、奄美の全てのメディアをその担い手のミッションや立ち位置に分け入りながら網羅するという作業の一環である。これまでの論考ですでに繰りかえし語ってきたように、日本のこれまでのマス・メディア研究や地域メディア研究は、特定の地域に準拠した研究をすることなく、新聞、テレビ、ラジオ、ネットといった特定のメディアの瞬間的事象だけを扱うか、純然たるメディア史研究が大多数であった。

そもそもひとつの地域には、どれほどのメディアがあるのだろうか。それを誰が担っているのだろうか。そうした関心から、〈地域メディアの総過程〉という視点を考えた。また、地域にある多様なメディアが競合・連環しながら、全体で大きな地域語りのうねりをつくりだしていく情報流の構造を〈表出の螺旋〉という視点で捉えてきた。〈地域メディアの総過程〉も〈表出の螺旋〉も、対象となるフィールドとの時間をかけた対話のなかから“発見”されるようなかたちで可視化されるものだ。そうしたなかで、あらかじめ特定のメディアだけに焦点を限定しないために、“地域メディ

ア”ではなく、〈地域のメディア〉という表現も意図的に使うようにしてきた。〈地域メディアの総過程〉も厳密には、〈地域のメディアの総過程〉である。

すでに発表した「奄美の地域メディアを俯瞰する：歴史・印刷メディア編」では、奄美との対話のなかから発見された四つのメディアの特性を指摘した。

(1)〈かたる：地域のメディアには島語りの位相がある〉
(2)〈つながる：地域のメディアは多様なベクトルで人と交叉する〉
(3)〈つくる：地位気のメディアは、文化の創生と結びついている〉
(4)〈ひろがる：地位気のメディアは、事業を拡張する可能性をもっている〉

（1）〈かたる：地域のメディアには島語りの位相がある。〉

ビジュアルな島語りにも、すでに指摘してきたストーリー次元、エピソード次元、象徴次元、素材次元という情報の位相の分類があてあまる。島のテレビでいえば、島の日日の出来事の紹介は、エピソード次元の島語りであろう。それは、素材や象徴次元の映像クリップで構成されている。写真集なら、間接的ではあるが写真集全体が一つのメッセージ性をもつことを考えれば、それもまたひとつのストーリー次元と言っていいだろう。島の八月踊りなどに代表される各種の無形民俗文化の紹介のような映像は、象徴次元の情報表現ということになろう。

写真・映像は、多様なレベルの情報が組み合わさることで、具体的には文章、写真を説明するキャプション、映像のナレーションと組み合わさることで島を語っている。つまりそれらは、文字・音声・ビジュアルの記号が組み合わさることで、島を語る文化装置として作動していく。そこでは、単なる素材次元や象徴次元のビジュアル記号を編集し組み合わせることで、より強いメッセージ性をもった作品としての島語りが生みだされていく。

(2)〈つながる：地域のメディアには多様なベクトルで人と交叉する〉

放送メディア編では、〈島外からのまなざし〉〈島内のまなざし〉という二分法的な視点を取り入れた。これを意識する必要があったのは、一般的なテレビ放送では、島に駐在する記者が送った奄美の出来事の映像が、鹿児島・福岡・東京経由で、県内・全国に放送されるからである。島の人々にとって、新聞は島の新聞を読む（新聞を購読していない家庭も少なくない）が、テレビは、通常は鹿児島放送局経由の一般的なテレビを見る。奄美を取り上げた県域のニュースを、島の人も見るのである。島の情報が、環流するといってもよい。

奄美は〈島外からのまなざし〉によっても表象される。それは、映画が典型である。奄美を舞台にした映画は多いが、奄美の人々が制作する奄美映画は、現在のところ皆無に近い。映画は、〈外部からのまなざし〉が、そのまま作品となって奄美イメージを全国に発信する。加計呂麻島を舞台にした「寅次郎　紅の花」や与論島を舞台にした「めがね」が典型であろう。そうした映画に魅せられて奄美を訪れる観光客も少くない。

報道の場合には、映画とは異なり、〈島内のまなざし〉が島外に出て、それが島外の編集のまなざしのなかで取捨されて放映される。つまり、島内のメディアではないが、島に駐在する島出身の記者から鹿児島・東京にあがるテレビ報道の流れは、〈島内のまなざし〉〈島外からのまなざし〉の相互作用を経て島に環流する。

また、群島内のケーブルテレビによる〈島内のまなざし〉にもとづく島内向けの奄美語りと、島内発でありながら〈島外からのまなざし〉というフィルターを経由した奄美語りは、多様な形でクロスしている。

写真の場合、本稿で紹介した浜田太氏のように、島出身者でありながら、〈島外からのまなざし〉を習得することで、島に帰島し、〈島内のまなざし〉と〈島外からのまなざし〉を融合させていく例もある。浜田氏の外に向けた発信力の強さは、東京の出版社で磨かれたものであろう。〈島外のまなざし〉というよりも、島外の技術資源の島への環流といった方が正確なの

かもしれない。

また、奄美の最も初期の写真集を出した松田幸治氏にしても、広島で広告写真の仕事を経験しており、氏が展開した独自のビジネスモデルは、そうした広告関係の仕事の上に産み出されたものである。島のメディア事業は島の人々だけによって、島の技術資源も含めた〈島内のまなざし〉だけによってではなく、〈島外のまなざし〉とクロスすることで成立している面がある。

こうした情報の流れや技術・人・モノ・金の交叉を視野にいれるために〈マス・メディアとの接合・共振〉というキーワードもつくってみた。繰り返すが、地域内のメディアの情報の地産地消だけに焦点を当てる狭義の地域メディア論ではそうしたことが射程に入ってこないからである。

(3)〈つくる：地域のメディアは、文化の創生と結びついている〉

われわれはこれまで、一連の奄美のメディアと文化研究の中で〈文化媒介者〉の重要性を強調してきた。映像や写真表現は、島という素材の中から対象をフレーム化し、それに意味を与えていく作業という点では、それ自体文化事業でもある。日日の報道ニュースは、島の日日の暮らし綴れ折りという、日常の生活文化の切り取りである。また、写真集は、対象に沿った取材、そして選び抜かれた選択という意味でも文化的なメッセージ性が強い。それは、島の暮らしと資源の再発見でもあるであろうし、後生に伝える文化メッセージでもある。メディアを先に設定するのではなく、文化を媒介するという視点からみれば、さまざまな島のメディアが文字通り“寄ってたかって”島の文化（高尚なそれから生活風俗的なそれまで）を再構成しつづけているといえよう。それは、たんに情報として報道・発信されるだけではなく、それを受け止める島の人々の自己イメージ＝アイデンティティの再定義とも結びついていく。

（4）〈ひろがる：地域のメディアは、事業を拡張する可能性がある〉

写真・映像などのビジュアルな情報に関わるメディア事業は応用範域が広い。島のテレビ局やビジュアルメディア事業は、まさにそうした展開をしてきた実例でもある。

島の中でフルセット型の産業を展開した奄美テレビはその典型であろう。そこまで大規模ではないが、例えば、写真家の松田幸治氏の写真家から出版への展開、越間誠氏の写真家から映像ビジネスへの展開、同じ浜田太氏の写真家から出版・映像ビジネスへの展開なども同様である。

地域メディアには、ジャーナリズム、議題設定機能、地域形成機能など多様な役割があるといわれてきた。ただ、メディア本来のそうした機能だけではなく、こうししたメディア事業の拡張も、メディアが地域のなかで活躍する一面であることは留意しておかねばならない。それは、島という限られた経済的なパイのなかで、パイ（雇用と売り上げ収入）自体を拡張する手法でもあるからだ。こうした事業の拡張は、特殊なことなのではなく、メディア事業のもつ一般的な可能性として積極的に評価されていく必要があるだろう。

最後に、テレビも含めて、ビジュアルメディアという視点を入れることで浮かび上がるのは、アーカイブスの機能とその重要性である。写真集は、貴重な時代の記録となる。映像も、記録媒体の劣化との闘いであり、各ケーブルテレビや他のビジュアルメディア事業者も、保存・管理に苦労しているが、それでも、島の貴重なアーカイブスとなっている。

人事異動によって担当者が交代する役所では、ビジュアルな資料の継続的な保管は困難であることが多い。図書館のアーカイブス機能は、主に活字に限られる。島にアーカイブスの機能をもった文化とメディアのセクターがない以上、ビジュアルデータの保管・管理は、どうしても個々のビジュアルメディア事業者にゆだねられている現状がある。島の文化遺産の継承にとってそうしたメディアセクターの重要性が改めて浮かびあがるとともに、島のビジュアルメディア事業の存在が、報道や発信という日日の

島語りだけではなく、島語りの記憶と記録にとって重要な存在であることを改めて強調しておこう。

■付記

本稿は、科学研究費（基盤研究C）、研究課題名「奄美における文化の〈メディア媒介的な伝承・創生〉とアイデンティティの再生の研究」（課題番号：16K02345）研究代表者：加藤晴明（中京大学）、共同研究者：久万田晋（沖縄県立芸術大学）、川田牧人（成城大学）、研究年：平成28年度～30年度、に基づいた研究成果の一部である。

■注

1）奄美における民放の影響については、鹿児島の研究者である古川義和や九学会連合調査に参加した加藤義明（当時、東京都立大学）による調査が行われている。

古川義和（1978）「名瀬における民間テレビの放映開始の影響について－事後調査報告Ⅰ」『南日本文化』鹿児島、11号。古川義和（1977）「名瀬における民間テレビの放映開始の影響について－事前のテレビ視聴実態報告Ⅱ」『鹿児島短期大学紀要』20号。古川義和（1977）「名瀬における民間テレビの放送開始の影響について－事前のテレビ視聴実態報告Ⅲ」『鹿児島短期大学研究紀要』21号。古川義和（1982）『名瀬市における民放テレビ放映開始の子供たちへの影響』南日本文化所、加藤義明（1982）「民放テレビ開設と視聴行動の変化」九学会連合奄美調査委員会編（『奄美　－自然・文化・社会－』弘文堂、528−554頁

2）NHKの記者の実島隆三氏は、1954年から1994年まで実に40年間記者を務めている。奄美におけるNHKの顔であっといえる。実島氏は、退職後の1996年に南海日日新聞に連載した記事を補正・加筆・改訂した単著『あの日あの時』を南海日日新聞から出版している。本の帯には、「南海日日新聞社創刊50周年記念　者生活40年の目で“奄美の素顔”に迫る　奄美に根ざした記者がまと

めた異色の好著！！」とある。

3）農村多元情報システム（Multi Purpose Information System）は、農林省が主導した地域情報化事業である。「情報化による農業経営の高度化」を明確な目的として掲げ、比較的標準化した有線テレビ・情報提供システム事業を展開した。有線放送電話の更新として導入されることも多かったため、有線放送電話が多かった長野県などで数多く事業展開された。業界団体として、水産省・総務省・経済産業省所管の社団法人として農村情報システム協会があったが、不祥事により2009年に破産している。

4）1970年代と80年代の奄美の観光・旅ガイドブックを「ガイド・奄美」をキーワードに国立国会図書館で検索すると、表のように20年間で10冊だけが列挙される。それ以降、1990年代に入ると急増している。

表6：1970年～1980年代に発刊された奄美のガイドブック

発行年	タイトル	シリーズ等	出版社
1972	奄美	S·T·S シリーズ	慶応義塾大学学生旅行協会
1973	沖縄・奄美：宮古島・石垣島・西表島・奄美大島・徳之島	ポケットガイド；35	日本交通公社
1974	南九州・奄美：宮崎・日南・指宿・えびの高原・知覧・鹿児島・屋久島	ブルーガイドパック	実業之日本社
1974.3	沖縄・奄美（再販）	ポケットガイド；35	日本交通公社
1975	沖縄・奄美：海洋博覧会	ポケットガイド	日本交通公社
1977.9	新日本ガイド.40（沖縄・奄美）		日本交通公社
1978.8	南九州・奄美	ポケットガイド	日本交通公社
1979	南九州・奄美：宮崎・日南・えびの高原・鹿児島・指宿・知覧・屋久島	ブルーガイドパック	実業之日本社
1982	南九州・奄美	ブルーガイドブックス；145	実業之日本社
1989.7	南九州・奄美	U ガイド；41	昭文社

※ちなみに現在の最も一般的な奄美ガイド本である『るるぶ　種子屋久奄美』（JTB）は、1997年5月発行のものから国立国会図書館に蔵書されている。『まっぷるマガジン　鹿児島：霧島・指宿・屋久・奄美　2005−2006』（昭文社）は、2005年5月からと比較的新しい。

5）〈文化媒介者〉という概念フィルターを用いることで、一般的な情報メディアだけでなく、文化を媒介するという視野から、さまざまな文化活動をメディアに組み入れることが可能となることも指摘してきた。これは、本稿の課題ではなく、〈文化〉のメディア社会学として、具体的には、奄美のうた文化と〈文化媒介者〉の一連の研究として展開している。

■参照・参考文献

芳賀日出男（1962）『そこに何かがある　秘境旅行』秋元書房

浜田太（1999）『時を超えて生きる　アマミノクロウサギ』小学館

ホライゾン編集室『奄美の情熱情報誌　ホライゾン』VOL.2（1995）、VOL3（1996），奄美群島観光連盟

加藤晴明（2016）「奄美の地域メディアを俯瞰する：歴史・印刷メディア編」『中京大学現代社会学部紀要』第9巻第2号、47−128頁

川上賢一（1981）『「地方」出版論』無明舎出版

越間誠（2000）『奄美　二十世紀の記録』南方新社

越間誠（2002）『奄美　静寂と怒濤の島』南方新社

九学会連合奄美大島共同調査委員会編（1956）『奄美の島々』毎日新聞社

九学会連合奄美大島共同調査委員会編（1958？）『奄美　自然と文化　写真編』日本学術振興会

九学会連合奄美調査委員会編（1982）『奄美　－自然・文化・社会－』弘文堂

松田幸治（1975）『奄美の世界』西日本新聞社

松田幸治（1997）『正史南蛮茶屋物語』自費出版

松田幸治（2007）『松田幸治非小説集成Ⅲ「島を語る。」』南國出版

松田幸治（2016）『独居下流老人の「家計簿」』自費出版

長澤和俊（1974）『奄美文化誌』西日本新聞社

実島隆三（1996）『あの日あの時』南海日日新聞社

須山聡編著（2014）『奄美大島の地域性～大学生が見た島／シマの素顔』海青社